

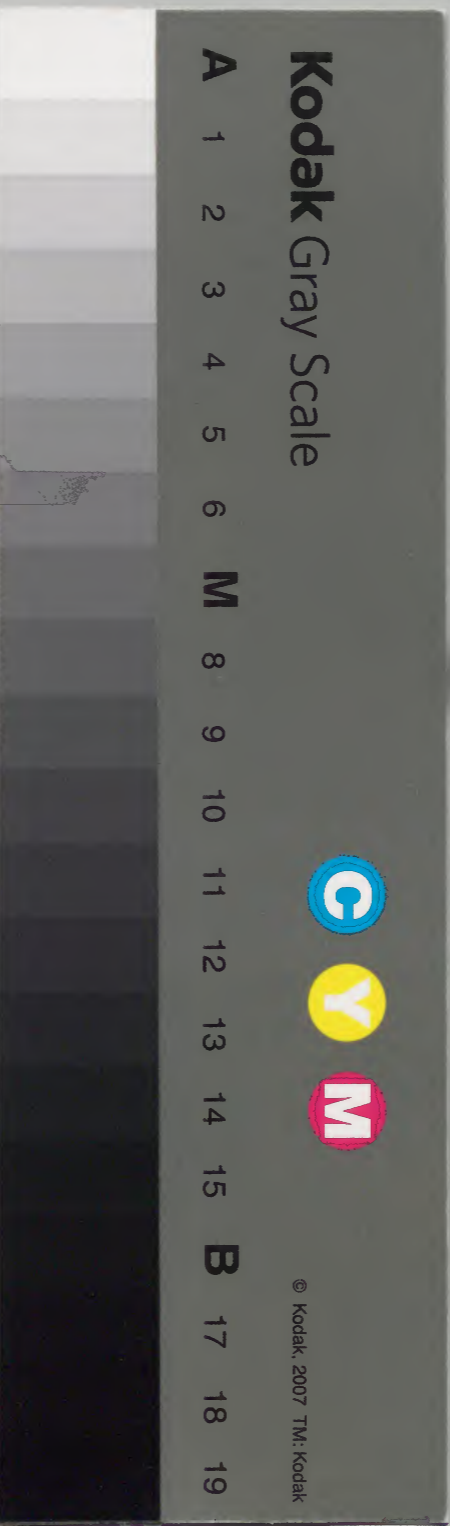
日本書紀傳 三十卷^{十八}

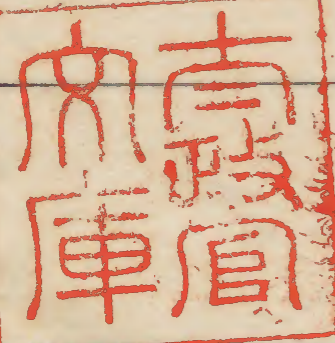
和書
一〇五二二號

百二十

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (129)
函號	85 1

内一五六八三號





附錄

古事記曰。此八十矛神。將婚高志國之沼河北賣。幸行之時。到其沼河北賣之家。歌曰。夜知富許能。迦微能美許登波。夜斯麻久尔。都麻麻岐迦泥豆。登富登富斯。故志能久迹迹。佐加志賣表。阿理登岐加志豆。久波志賣遠。阿理登伎許志豆。佐用婆比尔。阿理多步斯。用婆比迹。阿理加用婆勢。多知賀遠母。伊麻陀登加受豆。於須比遠母。伊麻陀登加泥婆。遠登賣能。那須夜伊多斗遠。於曾夫良比。和何多多勢。礼婆比許豆良比。和何多多勢。礼婆。阿遠夜麻迹。奴延波那伎。佐怒都登理。攻藝斯波登與牟。尔波都登理。迦那波那久。宇礼多久母。那久那留登理加。許

○日本書紀傳三十

○八百九十七

丙一六八三號

能登理母。宇知夜米許世泥。伊斯多布夜。阿麻波勢豆加比。許
登能。加多理基登母。許速婆。

此八千矛神之聞えさすのハ傳廿九五十一注一申せ

如く大己貴神の國作り御在_一坐むと為て先國

中の荒振る悪しき神等を言白させ御在_一坐けり程

の御名もあむ獲るせ給へりけり故其記の上文御父

大神の御許より生大分生り矢を賜りて還り御在_一坐る即の事也故持其大

刀弓追避其八十神之時每坂御尾追伏海河瀬追撥而

始作國也之有より直に受て此に攀たり此八千矛神

云と統けり此たりを以て其然る所以を曉る可

即上七百六十注せり此に初大己貴神之平國也と有

此御事を大三輪神三社鎮座次第に大己貴神持

廣矛為杖平國云と見えたり大倭神社注進状小

ハ殊に委しく傳はりて傳聞八千弋神者大己貴命以

廣矛為杖令撥平豊葦原中國之邪鬼是時大己貴命号

曰八千弋神と有を以て其專平國の御時の御名も

御在_一坐す御事をあむ明るの奉る可き者ありけり

記傳十一卷三丁に此神の事を記せり前後何れ段

の首より大國主神と有を此段の八千矛神と記

せりハ三首の歌の始に在り御名も此ハあり

可しと云れたりハ能も思ハれざりあり

○高志國ハ此の御歌に登富登富斯故志能久途と有り此

名甚古くより有つと見え八洲起元章より越洲と見
元乃より更あり事より出雲風土記より神門郡古志郷
即属郡家伊弉那命之時以日淵河築造池尔時古志
國人等到来而為提即宿居之處故云古志と有て此より
古志と云郷名の有る本は其古志國と云ふ有る依て
出来り称あり者あり又古事記足名推手名推神の
須佐之男命より申せり言より高志之八俣遠呂智と有る
高志ハ傳廿三八百八十十九丁八十注るが如く近江國膳吹山是
あり此山近江美濃越前の三國より跨りたるハ高志國
と云へき事本よりあり又出雲風土記意宇郡母理郷

條より所造天下大神大穴持命越八國平賜而還坐時と
有る越八國ハ上六下十注るが如く北陸道の國とを
經て出羽國より至る迄の諸國を惣云ふありけり又傳
廿九五十上七十丁三引る紀伊愛徳社建保縁起より水母
行く國漂よみ大男汝世を始給ひし時古志の片道七
日行く船泊無れば此神泊を造らむと思し食て宮を
出て其所より御在し坐て作給へど晝作給へば夜崩れ
七日の其間三度作給へども作敢ず杵舂宮より還給ひ
て諸神告て宣はく云ふこと有る大己貴神の故事あり
より右の如く古志の片道と云ふハ其後より云ふ北陸道

を云ふ舊稱あり記傳十一丁子此高志と云ふ國名は
越後國子古志郡有北比佐例子依子其より出たり
やと云ふ凡多然る説みて大同類聚方子古志葉三
宅神社傳方元波大彦命傳割三宅連等之家方と有
ハ式子謂ゆる古志郡三宅神社二座と有る是子て実
子此邊子高志と云稱起りて其より廣く北陸道の惣
稱と成ゆりて彼阿豆麻波夜の御言より坂東の
諸國を凡て阿豆麻波と云事と成ゆり等しく可き
が其故事ハ一七傳りけりけれハ其高志と云名
義を今如何とも知へず便宜子む無りけり
今強て思
ふ子右子

引り出雲國古志郷の故事子起りたりや其ハ此越
後國古志郡より始て其國人の出雲國子到る事の
世子甚ト事あり依て當昔已高志と云て到
来の義を以て其本國子号けさせ給へり有るハ
や諸右の越洲と云ハ傳六卷百三十四丁廿七卷七丁
二下子注々ガ如く能登國の古孤島より一時の稱不
島子謂りて高志國子屬り○沼河比賣記傳子式子越
後國頭城郡奴奈川神社和名抄子同郡沼川加波郷有
り此地名あり然るハ此ハ奴奈加波と訓べし後靖天
皇の御名の神沼河耳命を書記子ハ神諱名川耳尊と
作らりて思定めて攝と見えたり万葉十三丁子沼
名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可毛安
多良思吉君之老落惜毛と有る歌子依子実子瓊之河

あり可し故大同類聚方は「奴奈加波」とも「奴奈加」とも
 也乃加波とも云り備沼河と云る川名今無しと雖
 とも水上ハ黒姫山と云より出て姫川と云る大河有て
 謂ゆり糸魚川イトイガハの地是ありければ今姫川と云るあり
 古の沼河あり可き其流ハ甚く峻嶮ハ山川の故
 多や其速き事矢を射るが如くして水の滞る事無レ
 ハ水底迄澄渡りて砂石共々甚く清く玉とも謂つ可
 く流磨クれば乃りければ實ハ瓊之河とハ号く可き状
 ありけり故是を以て其地名とも成り將此女神の御
 名も負坐るありけり然して右の神傳名川耳尊の
御名と古事記に沼河と書レ

たり其正字は「瑞珠盟約章第一」書ハ謂ゆり天降
 名并同義は「御兄ハ神ハ并耳命ハ對ハセ給ヘリ
 御名は此とハ別あり事傳十六卷三十七下ハ己ハ
 注るが如し備此の沼河ハ借字にして其義ハ瓊之河
 ありければ唱の目トキ故是沼河比賣命の出自ハ
 任ハ一ハ為事勿ル下ハ借字
 郡家正東廿七里一百六十四歩所造天下大神命要高
 志國坐神意支都久辰為命子保都久辰為命子奴奈宜
 波比賣命而令産神御穂須ニ美命ハ是神坐矣故云美
 保と有る是乃り備右の高志國坐神ハ奴奈宜波比賣
 命ハ係りて上の二柱ハ奥津筑紫居命邊津筑紫居
 命の義は「傳十四百三十三下」注るが如く海神の本宮ハ

筑紫ありけれは其御許に侍坐^{サマシ}給ふ神の謂ふて若く
は海神の御子孫に生ふる可くや其姫川の傍に謂^{イハ}ゆ
る青海神社御在し坐る今に青海駅と云地有り姓
長録^{右京神}別地^{祇子}青海首推根津彦命之後也と有て海神
の裔に列はるる大同類聚方に表志薬越後國頸城郡
主帳無位滄海臣事持等家方大己貴神傳云、初方奴
奈川薬と有て青海神社に由有り滄海臣の傳たり
方は奴奈川薬の名有りハ必其依る所有べく思ゆ
は次は注せし能登國能登郡能登比咩神社ハ此女神
あり日羽咋郡奈豆美比咩神社阿都見村に坐ハ海神

之聞えて由有り又隱岐國海部郡奈伎良比賣神社
此神と思しきを知夫郡海神社二座坐るふとの由縁
を案め考ふる詔河比賣命の出自ハ必海神あり可
き事灼然き者あり^{右の奴奈川神社の別社あり}
里許に鍛冶屋敷と云ふ驛有り其地ハ^{可一糸魚川より東北の方一}
云有り^{予が往年詣}
たりし時神主某が其社記と云て古き巻物を取出して
見せたりけり^{往昔天神高皇產靈尊之御子意支都}
久辰為命者神祖之詔命以而天降坐而知座奥津海原
亦此神之御子^{此神者所知海邊神也}
此神之御子奴奈川日賣命坐此大神神者瓊那須容
兼美御心聖大坐也共皆於高志國宇志波支御坐也故
此高志國之頸城郡^{此高志國之頸城郡}
根宮柱太敷立高天原知疑多迦新理而御鎮座也故此
大神之御鎮座故郷号詔川郷也と有り右の神名共此
字ハ出雲風土記に依て書下者ありけれハ近せし出

○日本書紀傳三十

○九百三

来々物あり事ハ本より論無一然ハ有ル也高皇
産靈尊の御子と云ふも甚可畏くて其撰ヨリ成
難き事ありけれハ據も有る若然す此作者
大なり罪人なり神沼山珍々神瓊之山の義あり
凡てハ偽ありむも知べうさハ右の二神共
海原を知生す神と云ふハ海神の御子と云ふハ傳有て
の事不備其奴奈川神社ハ一も傳廿九
五十五
六十五
五十五
注カ如く沼河北賣命の本居あり一うハ千戈神
の屢有通ハ一御在一坐け神迹ありハ故ハ上古
ハ甚く御隆元坐一御社あり一ありけり大同類聚方
十四ハ於古之藥越后國頸城郡奴奈川神社二傳留方
大祝大神巖彦等所奏之方元者大汝持神乃神九周理
六十九ハ奴奈加波藥越^後國頸城郡奴奈加波神社神

方也遠飛鳥宮坐治天下天皇御宇奏之元者少彦名命
神削也祝主古志公村主等家傳之方と見え又異本ハ
奴奈加藥越後國頸城郡奴奈加波神方元者少彦名神
割大己貴命傳方也又奴乃加波藥越後國奴乃川神社
傳方也古志公村主等云々又奴乃川藥矢尾之醫師阿
津田氣連麻呂云々と有る^{有る}當昔世ハ名高うり一状
を見奉り知り足れり此時の御事ハ因りと思へく
上^ハ六十^ハ委曲ハ注一奉るが如く式ハ謂ゆ目郡
大神社ハ大物主神ハ渡りせ給ひ居多神社ハ大己貴
神ハ渡りせ給へハ此奴奈川神社ハ其沼河北賣

命の御社あり可き此神の亦名を能登比咩命又芳都
比賣命とも申す由又能登國より一使御名方神を生
坐し御事あり下九百五十五丁に注し奉る可きなり此御社
糸魚川より東十町許に天津社と申す大社有り其境
内地主神と唱へる社即奴奈川神社ありや此
邊を沼川莊と云ひ又沼川池と云ひ已方一里許に在
り云り又右にも云る糸魚川より一里許東北の海
濱に多布勢社と云有る此をも式の奴奈川神社あり
と云事ふれども沼川に彼姫川の事ありければ右の
天津社の境内あり方當れども似たり但此邊迄度々

沼川郷ありむすハ必然非なり難言かり本社ハ沼
河比賣命天照太神へ千弐神三座あり天照太神を此
小祀の事何あり由あり其撰神に御社に社國造社皇
子社治木社宗形社建日社とて坐し此頃設たり事と
も見えずと雖も亦然事足ひ過たり小就てハ疑無き
小非ず其社記を見たり御社に高皇產靈尊意支都
入命大彦命長比賣命三座と有て大彦命四世孫市入
命長城に坐て國民を治賜ふ亦聚長比賣生建淨比古
命賜せと云り國造本紀に高志國造賀高比孫朝御
世阿閉臣祖屋主田心命三世孫市入命定賜國造と有
を此に引付たりけり又其長比賣と云ハ何れの人
女ありや疑ハハキ事あり皇子社ハ此沼河比
賣命の生坐へる御子十一神を載たりども信ハ難き
事あり其ハ下九百五十八丁に辨ふ可し治木社ハ治

○日本書紀傳三十

○九百四

津彦根年五十猛命大屋津姫命批津姫命四座あり宗
形社ハ三女神あり建日社ハ吉備建彦命ありと云り
右の如く余ノ事ハ足ひ過たるとハ後入の所為疑ハ
しき物なり然許り皆グクハ偽を措く可き事非ルハ
事ハ據有○將婚ハ記傳ハ用婆比ルと訓ハ此言
即御歌ハ出たりと有り其下九百十ハ注す可きあり
○幸行ハ記傳ハ伴傳麻志ニと訓ハ下ノ志ハ辭不
り行賜ニを云古言あり書紀天智天皇御卷童謡ハ伊
提麻志と見え万葉八十二ハ小伴而麻左自常屋ふと有
り行のミありず来をも云ハ今の俗語ハ行をも来をも
御出成さると云と同ト此ハ天皇子限ハ尊ニて
ハ誰カ上にも云ハ事あり取と有カ如ク御記の例ハ

天孫降臨章遊幸の字ハ就て傳三十一ハ百丁子注す
可ク○歌日記傳云字多比賜波久と訓ハ○夜知富
許能迦微能美許登ハ八千矛神命あり凡て某神命と
申す例ハ傳廿一五寶鏡開始章第二一書あり日神尊
の下ハ注ラケ如ク他より崇敬ハ申す時の事あり然
るハ此ハ御自然御言ハ出ハ給へるハ其對ニ神ハ女
神ハ御在ハ坐て此ハ御妃と成ハ給ふ可キ神ハ坐ケ
故ハ遜言を用ひさせ給ハざるふり○夜斯麻久ル
ハ八洲國マテ大八洲の國の限と云事あり次の御句
ハ登富登富斯の御言を宣ハ下あり橘后須勢理毘賣

命の御歌子夜知富許能迦微能美許登夜阿賀淤富久
近奴斯許曾波遠近伊麻世娶宇知微流斯麻能佐岐邪
岐加岐微流伊蘇能佐岐流知受和加久佐能都麻母多
勢良米之有子て七國の限を妻覓一給へる趣見え九
り継体天皇七年御紀句大兄皇子躬春日皇女歌小野
施磨俱你都磨磨祁哥泥底播屨比能哥須我能俱你你
之詠給ひて程も無き春日の地子妻覓一給へる事不
る子八洲國を宣へるハ此ハ國の限を未盡させ給へ
る義よて又無く深き御志の程を述べ給へるハ
之を合せ考ふ可き者ありク一記傳ハ八島國の中子
て云意ありと云ル

巡張方葉多く
不得書り

たのハ唯深く見らるるなり此ハ万葉十三卷相聞
歌ハ式島乃山跡乃工冊人ニ有年念者難可將焉と有
得へき所なり○都麻麻岐迎泥豆ハ右の句大兄皇
子御歌子ハ都麻麻祁哥泥底と有と新子妻覓加祢底
也難覓也と有り記傳ハ都麻ハ妻麻岐ハ覓あり神代
下卷ハ覓國此云矩武磨儀白檮原宮天皇御歌ハ延表
斯麻加年と有ハ將覓あり万葉七五下ハ過往人尔往
卷目ハ方ふども見由宇治拾遺物語ハ人の妻覓く者
有りし云り中昔通し云ら言と見由略下ハ所見たり傳
六四十三二百六十注せり共為夫婦又應天皇十三
年御紀ハ得夫を麻具波理兵と訓る麻具ハ更あり字

鏡集小婿字を麻具と訓ふ事どもモト見めてア婿ア不義も兼
 たりけりや○登富登富斯次あり政加志氏相慮を所より記傳子遠こあり此
 言古書も中昔の書も他子ハヲ見えずて返
 りて今世ハ常云云言あり源氏從角卷ハ轉カ遠こ
 く持成させ給へハ云々此を疎こキを云云ありと
 云ルキ此ハ右の夜斯麻久尔の下子注が如く大八
 洲の國の限を覓させ御在一坐て遠く高志國ハ至及
 かせ給へハ由を述させ給ひて御志の淺く御在
 一坐す事を告聞えさせ給へハありけり瑞珠盟約章
子素受鳥尊の日神子申させ給へハ御言子吾元無黒心云如
 不共御相見吾何能敢去是以跋涉雲霧遠自來參と見

但常云云賢女の
 意ハ非テ智深ク
 賢キナリ

えたり遠自來參の御言も右ハ同トくて今世の俗
 言ハ人子志の深キ由を云むとハ先此言を云て
 同格○佐加志賣ハ記傳子賢キ女あり書紀崇神天皇
 御卷子叡智仁賢天皇御卷子賢此云左河之土左日記
 小別人ハも有げふれど賢一キも無ク可一此ハ歌の
 宜キを云レと有り備其古書子正一く佐加志賣を云
 証ハ肥前風土記佐嘉郡の一説子一云郡西有レ名
 曰佐嘉川年魚有之其源出郡北山南流入海山川上有
 荒神往來之人半生半殺於茲縣主等祖大荒田占問于
 時有土蜘蛛大山田女狭山田女ハ二女子云取下田
 村之土作人形及馬形祭祀此神必有應和大荒田即隨

其辭祭此神神歌此祭遂應和之於茲大荒田云此婦如
是賢女故以賢女欲為國名因曰賢女郡今謂佐嘉郡
訛也と有る是正しく賢女の字に當れり證あり又記
母の賢しきと云ハ常の俛立て思くき方子多く云
うれと此ハ然り非ず唯愚あり又よて稱譽たり言不
りしと云 ○阿理登政加志氏ハ勾大兄皇子の御歌に俱
婆施謎鳴阿喇等根^有底與^有盧志謎鳴阿喇等根^有底
と有る同トく有と聞而ありを此ハ有と聞食而の義
よて此方を尊と宣へるあり 記傳ハ有と聞而を
と云ルたれども常の彼方を崇めて云言あり上
の自の御事ハ子牙神命と遜す宣へると同ト格子
可 ○久波志賣ハ右の御歌の俱婆施謎鳴を叙す如

隱采之長谷之川
之上瀬下瀬爾鴉矣八頭
八頭漬
今作やそハ皆葉
と置云む為の序
カ

女也私記曰師說妙女也と有り記傳子久波志賣ハ嚴
女と云む方如し万葉十三^{三十}上瀬之年魚矣今作
下瀬之鮎矣今作嚴妹尔とも續け詠り又古書に細字
を久波志と詠り水垣宮段也目微比賣と云人名と有
りしと見えたり御記に其を遠津年魚眼眼妙媛と作
ル又其七年御記に見えたり倭迹迹速神淺茅原目妙姫子有久波志比賣
此の久波志賣の義を以て名と為る者
あり諸右の佐加志賣ハ其智慮の世に賢しきを云ひ
此久波志賣ハ其容儀の嚴しきを云て甚に不足の
事無く備り整へる較略を此子と述させ給ひて遠く
慕ひ御在り坐けり御意味を此二句子と盡させ給へ

今又上卷廿五丁十八
 千文神自御世之
 婦人知年未若忘者
 有公此神の御妻
 一々を尋りて終り
 事の名高き事以テ
 奇

る者あり故右の句大兄皇子の御歌より其形を就ての御事
 りよて万葉十三卷廿一丁子走出之且山之出立之妙
 山叙と有と同ト例ありけれバ此と對句の状タリ
 異ありと○伎許志互ハ聞食末段の義あり○佐用娶
 知べし△
 此ハ記傳の佐ハ真子通三辭あり用娶比ハ万葉子
 結婚と書り靈異記子伉儷疾波不とも有り言の意ハ
 呼より出たらしむ今世の語子婦を呼と云も此あり
 略と有り饒体天皇前御記子ハ遣使躬干三國坂中丹
 と有と躬字を用娶布又米須とも訓ミ万葉九五丁子
 相結婚為家類時者十二丁子佗國年結婚行而十三
 四丁子隱口乃泊瀬乃國尔左結婚丹吾来者又隱口乃

長谷小國夜延為吾大皇寸與と見え伊勢物語子女の
 得エりウトトウりけりウを年を經て婚ひ渡りけりウを又其
 國ニ在りウ女を婚ひけりウ又大和ニ在りウ女を見て婚ひ
 て遇ウりけりウと有と有と扱ウる言寄る事ありと註し大和
 物語ニありウ 御子
 達上達部婚ひ給へど御門子奉らむとて遇せざりけ
 此バ又小葉師尿と云けり人或人を呼ひて遣せたり
 けり又由著と註しウく在りけりウバ婚ひ人も甚多
 在りけり殿上人あど婚ひけれと過ざりけり又此
 又上御在り坐けり世に婚ひ奉りけり時云とあど有

今二十行伊多里長
年規具之夜里都礼
又平可辨理後唐之
源支礼都具礼十八
行小美知能久乃小
田在山尔金有等
麻宇之多麻敵礼又
二十時支久能香各
能許之多麻敵礼
十九行語餘余我
良倍伎多礼又二十
露霜之運麻之年家

礼

又進行と阿理久と訓り有行の義あり可し字鏡子蹟
と阿留久と訓り往來也と云り古事記の歌子阿理多
二斯阿理加用勢勢と見え又記傳子此句ハ上ノ許膏
たると此義ありと云り
之云候も無く又仰る言も非ぬ下を勢て芽四音
以て絶此に古の長歌の中ニ在る一の格あり万葉
二二十天傳入日刺奴礼又三引放箭擊計久大雪
乃乱而來礼三五十八久堅乃天所知奴礼五九周具
斯野利都礼又四十靈刺伊乃知多延奴礼五此等皆
然り何れも上より云統け来つる言を姑く絶て事の
轉る際子在了事皆目ト披き見て考合す可し又其五
三十好去好來歌子唐能遠境尔都加播佐礼麻加利伴
一丁

今二十行今日大仁
世許等勝比勢武
等年之天都不可
左之備伊麻世不

麻勢と有る此勢も同ト格ありと云北たり
り多在るハ詞玉緒七卷ノ長歌の一の格の詞と有る
此引北たりを此合せたり故多其終云く
此等上ノ許膏の辭無くして勢と云て切北たり上の
礼と同ト格あり此礼と勢ハ皆長歌の字子在上事
の位ハ轉る際子云ふ一の格
て礼婆勢婆と見えハ能通の多り云くと云北たり
○多知賀遠母ハ記傳ハ大刀之緒とあり能と云て賀
之云るハ古斯る物も例多一万葉二十三十子非毛
我乎と有ハ紐之緒あり緒ハ身小著佩く料あり其状
ハ太神宮式神寶子玉纏横刀一柄柄長七寸釦
長三尺六寸柄頭横
著銅塗金長三寸八分頭頂著頂作環一勾著五色組長一
丈阿志須惠組四尺柄著勾金長二尺著鈴八口琿
拍王二枚金鉤

形一雙著緒紫組長六尺云須我流横刀一柄柄長六寸
其鞘以金銀箔畫柄勾皮長一尺四寸裏小暈銅錦長一尺
之柄以鶴羽纏之押鏡形金六枚柄枚押小暈銅錦長三寸一分
廣一寸五分四角五乳
 形著五色組長一丈阿志須憲組四尺金鉤形一隻長六寸
二寸著紫組云々新作横刀二十柄摺柄長六寸五分
五分裏排帛兵倭文節別纏小暈銅錦阿志須憲長各三尺三寸
柄以鳥羽纏之寸著緋紺帛緒長九尺廣二寸と有りて知べし補て見
意云々可くして上古の遺制ハ右の玉纏横刀須
 我流横刀二刀の状是なり此を合せて播磨風土記

昔大帶日子命詔印南別嬢之時御佩刀之八咫劔之上
 結尔八咫勾玉下結尔麻布都鏡繫時云々と有ハ右の
 玉纏横刀寸著鈴八咫瓊碧玉二枚と有ハ似たりを彼
 ハ勾金を以て貫通したるを此ハ紐緒を以て結繫た
 り一物と所見たり但右の八咫劔ハ八握劔を誤れり
 とも思ゆれども猶其柄の八咫ありを云あり可し
 然して劔の装束ハ必玉と鏡とを其柄頭に著たり
 一ありか上結ハ八咫勾玉を繫け下結ハ麻布都
 鏡を取繫る上古の習俗なり一事知る此ハ大刀之
 緒の例ハ非すと雖も紐緒を以て玉鏡を飾たり

今方葉十二卷中下
玉劍卷宿妹母と有
る玉劍の誤り
云ルと右の葉
に多例共ニ依ル
の任之在バキ
又十卷五十五丁
後玉纏田丹ル有
右等ノ柄頭ノ者
ヲ外ノ朝後日玉
を飾リテ見
たり者ト見

状を事の因に書すあり 其八咫勾の下に玉字脱た
る古書ハハ八咫勾玉と云ハ云ハ八咫勾玉と云ハ
例無ルハ誤多事知べ今ハ製極ヨテハ劍柄ヨ玉
鏡を著ベキ由無一ト雖も斯ノ例の有上ハ燧袋
小綱めてあり玉ト鏡のニをバ必劍ノ割て持ベ
キ故実此 神名式ニ伊豆國田方郡劍刀平夜尔命神社
ニ著明一 神名式ニ伊豆國田方郡劍刀平夜尔命神社
と有も劍刀より緒と係ルヨテ此ノ大刀之緒の例
あり物より猶平夜尔ハ緒弥瓊ト右の上結ハ八尺
勾玉を繫ると同ト意味あり可くヤ景行天皇四十年
御紀ニ昔日本武尊向東之歲停尾津濱而進食是時解
一劍置於松下と見え又於是聞近江膽吹山有荒神即
解劍置於宮實媛家而徒行之と有 尾張風

土記ト以隨身劍掛於桑木遺之入殿執田縁起ト有
桑樹解所帶劍掛桑枝出厠忘劍還入寢殿亦と解トモ
掛トモ有ハ即此大刀之緒の事なり又記傳ト引ルル
統後紀ト美和元年十一月丁未朔壬申制曰鞆司物
部刀緒用胡桃漆又三代実録貞觀十六年ト檢非違使
の請ト依テ横刀之緒五位已上同用唐組六位已下並
用綺新羅組等ト有テ中頃トハ位次ト依テ各其差
有けりあり故延喜 式ト凡衛府舍人刀緒 云ト
ト見えたり又神樂劍歌末ト以曾乃加美不留也遠止
古乃多知毛可奈久美乃遠志天ト美也知加興波年美

也千可與波牟と見元又或本此歌拾遺集神祇部に收り伊波比古之加美
 波末川利川安須與利八久美乃遠志天々安所及太知
 知波幾とも有り又拾遺集物名小川の橋を詠ふ歌
 筑紫より此處まで来れど土産も學ハ大刀の緒草の
 端のハ有さふども見ゆハ後ハ下緒と云ふ物是ふ
 名於此度利と有て即帶取の義あり右の護字を説文
 小佩劍絲也と注ルハ大刀之緒の事あり又比良表と
 物より綴又汗緒又平緒と云ふ言を同くして即同
 前黄地青終紅梅地櫃終薄櫃終香終白地鈍色等の品
 有て然ハ緑色ル事あり委しくハ本書に就て明
 可ハ○伊麻陀登加受而ハ記傳に未解而有り万葉十
 二ハ十ハ伊國亦結婚尔行而大刀之緒毛未解者左夜曾

今所歌之邦賀和勢
 流意須比能須比
 尔又

明家流此ハ此御歌の意を約めて詠ふ歌ありと云ル
 き此ハ其詔河比賣命の家の外ハ云煩ハいせ給へり
 義を合さて給へりあハり次の御句ハ流須比遠母伊
 麻陀登加泥婆と有と文ハ其詔河日賣未開戸自内
 歌曰又故其夜者不合而明日夜為御合也と有とを合
 せ考不可ハ○流須比ハ記傳に日代宮段梅建命美夜受比賣
 歌ハ和賀和勢流意須比能須蘇尔高津宮段女鳥玉歌
 小波夜夫佐和氣能美淤須比賀泥万葉十三三十
 伴坂上郎女祭神歌ハ十六月物膝折伏手弱之押日取
 懸如此各裳吾者祈奈牟外宮儀式帳ハ大物忌無位神

主因成女云ニ著明衣水綿手次前垂懸天押日蒙
白洗平不子 之二所太神乃朝大御饌夕大御饌
平日別齋敬仕奉多と見え太神宮式の御装束の中
帛意須比八條長二尺五と見え度會宮の子ハ帛須忍
比四條各長二と有り儀式帳子ハ其絹を施子條を具
と作キ廣隨幅と有り正中御簀子ハ綾忍比と云ハ
弘一幅と有り此等を以思ニ此名ハ意會比と通ハ
と襲覆を約カたリ多ク備其状ハ一幅子在レ二幅子
在レ幅子隨子甚長キ物多と後世の婦人の被衣子
心子如ク頭子被リて衣の上を掩ヒ下ハ襦子垂

ろと見ゆ其ハ上代子男女共子人子誰と知レトと面
顔を隠す料の服と見えたり今此も御妻問の御時不
ルハ御顔を人子隠ビ給ニとて著給へリ多ク可ク又
彼女鳥王の年別王の為子織給ニもハ已令の誦隠ビて
通給ハむ料と見ゆ諸女ハ常子も人子見ゆ事子耻
て顔を隠す物子一有レハ何時とても著たり可ク然
るを奈良の頃子多クありてハ男の著る事ハ已ク絶
て女の古の礼服子如クありて神を祭ル時子多クもの
に著けりあり可ク右の如クふレハ此子有職家子
隠絹カクシダと名くと或物子見えたりハ古意子克叶へリ名

ありりり一取と云れたり是もて上代の源須比の状甚
詳なり知れたり右の女鳥王の歌御記に仁徳天
皇四十年に當りて源於須比の事と見誤る
れたりを秋御記御装束也と有る其曾比の事と見誤る
るたりが故なり事を知べし此を以ても鈴屋大人千
載の下に生れ其説を得るなり其著る状を試み深き遠
き思兼よハ有ける又記傳に其著る状を試み深き遠
中夫の所を頭子當て蒙り左下へ下して帯の邊に
て遺違へて腰に纏ひ前へ回して結びて端に欄
へ垂るる可し其委しき事ハ知り難けれ右に
引る古書共の類を合考へて大概ハ知るる云れり
此に就て思ふに後姫命世記の意須比飯高國と有る
意須比に結ぶ係なり其の但飯ハ何行姑ハ夜行
よて異なりけりハ猶外に義有るべし云に其言ありて意
子物を盛る余曾布とも意曾布とも云に其言ありて意
曾比たる飯高しと云に祝詞ありて云に左にれども猶
落着ぬ心ち名義抄に慢子を宇波意曾比と訓りハ
上襲の言ありける若くハ其幅の任に用ふるが慢字

を書て此の源須比の例に諸寛平熱田縁起に彼宮酢
姫の事を彼姫所著衣裾深於月水と有るを参考し舊注
衣裾此云意須比裾一作裾按記皆云意須比能須燕
裾者須燕也衣上恐脱襲字不然無縁訓曰意須比且歌
中意須比乃字附者襲衣表也云云然の事ハ此説ハ
字に意須比の訓ハ有るべしハの事ハ此説ハ
謂ル ○伊麻陀登加泥婆ハ其源須比をあり記傳に此
ハ其結固めたる處を未解の問あり泥婆ハ奴尔
と云意あり天智天皇御紀童謡に於弥能古能野皇陛能
比母紐騰解俱比騰陛多尔伊麻拖藤柯皇祢波美古能比母騰
矩。之有る此も未解ぬもの意あり万葉二三十五丁に嘆毛
未過尔憶毛未盡者此二の泥婆上の奴尔と同意あり
事頭ハあり四二十五丁に筑紫船未毛不來者豫荒振公平

見之悲左又二十奉見而未時太尔不更者如年月所念
 君八十霜雪毛未過者不思尔春日里尔梅花見都
 又二十字能花毛未開者霍公鳥佐保乃山邊來鳴令響
 又三十秋五而幾日毛不有者此宿流朝開之風者年本
 寒毛又三十秋田苧借廬毛未壞者鴈鳴寒霜毛置以
 我二又五十吾屋前之茅子乃下葉者秋風毛未吹者如
 此曾毛美照二十小一年迹七夕耳相人之德毛不遇
 者夜深往久毛一云不盡者佐又三十天河足沿渡君
 之年毛未枕者夜之深去良之又三十秋茅子之德裳不
 盡者左小鹿之聲伴統二志許增益焉又四十秋山之

木葉文未赤者今日吹風者霜毛置應久又五十卷向之
 樽原毛未雲居者子松之末由沫雪流十二他國尔
 結婚尔行而太刀之儲毛未解者左夜曾明家流亦此
 餘多多在り古今集秋上も天河淺瀬白浪歌りつ
 渡果仕ハ明子為けりと有り儲此處小て語を絶
 乙次句ハ連けず下の阿遠夜麻尔云この處ハ係て
 心得ベ補之有り右ハ詞玉儲七卷泥婆條ハ取て補
 尔云意あり多ハ上引其説云此泥婆ハ皆ハ
 上必其意を舍のり十卷廿七下左始而何太毛
 不在者白袴帯可乞哉意毛不遇者有此歌ハ
 泥婆二有て二所泥婆の意を舍り又其五十八下
 小於黄葉置白露之色葉二毛不出跡念者事之繁家ハ
 之有此念者も思エ子の意ハ右の泥婆ト同ト

恒心永存
責許能
朝倉宮殿
御歌
伊加久流表
有ハ強

殆ありと云れたるハ甚し奇
珍ありと云れたるハ依て攀つ
女之よて沼河比賣を云ふあり
伊多斗遠ハ記傳ハ鳴す板戸を
即戸を閉す事を然云りと聞ゆ
閑き戸よて閑閑するハ音有る
空蟬卷ハ此御格子ハ閑てむ
或吹子鳴すハ格子を下す音
多斗斗意斯比良伎と有ハ即
見ゆと云り佐那須と改たハ
佐ハ例の眞子通二辞ハ

り備此ハ今閑すを云ハ非ず閑
夜ハ辞ありと有て明くハ
くざるを能為す事を常ハ然
を以て不成と云ハ已ハ閑
云ハ者と思ひハ甚
鹿ハ説ハ有ハハ有ハハ
歌ハ 葦紀佐俱避能伊陀圖
十五 小奥山之真木乃板戸
何將為又 奥山之真木之板戸
霜上尔宿奴十四 於久夜麻能
等抒登之兵和我比良可武尔

えたり○遊曾夫良比ハ記傳小押あり夫良比ハ万
葉十四二十小多礼曾許能屋能戸於曾夫流と有る
夫流を延て云多りて有か如し其閑固なる戸を押揺
引試させ給へるあがり○和何多勢礼婆ハ記傳
小吾立有者コカクテシ多互礼を延て多ニ勢礼と云ハ五を
多と須と云格不と云れたり○比許豆良比ハ記傳小
引あり万葉十三二十小忍照難波乃埼尔引登赤曾明
舟曾明舟尔綱取繫引豆良比有雙難為曰豆良貞有雙
雖為云と有り備押引を如此押夫良比引豆良比と
添て云る唯閑戸を押引カニカク左右小して強閑

むと為給三状あり今世言ふも引を引豆流と云ふ豆
良比ハ即豆理を延たるあり源氏物語紅葉賀二十小
相撲をトルク引トろふ程小ホコニびハホコクこと絶中將色
むのろ名や残出む引交し如此ホコろふ中の衣ハ横
十三小良久引トろム閑て入給ふ宮の御方小例の御物語
聞え給ふ若菜上百小綱甚長く付たりけりを云
と逃むと引トろふ程夕霧二十少思ハむ所を無下
小耻給ハぬ一打憂めきて借自一引トろひ給
ハ何ハ又三十小き兒這掛り引トろへる取し又の事
も思出給はず寄生五十小常の事目馴たれハ氣

評より始て夜鳴あり鳩よりも少く大よて鷲羽の如
 くと云り鳥ふどの類して夜鳴ありむと云れたる
 如くして深更よ及びて鳴く者ありければ此の時の
 徒る事を宣へるあり次あり雉又鶴ふどの夜の明る
 子随ひて鳴く物ありを列ね詠せ給へる子合せ曉る
 可き者ありう或説子奴延鳥ハ俗子云云猫鳥の事
声將同トキ由云る 其頭猫の鳥子似たりと云り鳴
二十四下子注せり 休留又恠鷓又姑獲鳥ふど皆同種
の物ふり儲冠群考子ト歎居者ハ彼ハ声の悲しく恨
ウーげありを人の哭泣子置り能柿與此居年ハ
喉呼ハ隱聲ありハ非下若色子鳴く方よて云あり
けりて云れ子片恋婦と鏡けたるハ声の頑しき義不
ふりや漢籍孟子子今也南蛮歌名之人と有を注し悪
声之鳥と云り其色ハ頑しく恨むハ如く愁ふるが

春遊而野邊尾
 画者面白見我天
 思經奴杖野津鳥
 来鳴翔經と有此
 子ハ

如く若幸子か如く多し ○佐怒都登理ハ真野鳥子て
 恠鳥と云りけり ○佐怒都登理ハ真野鳥子て
 右の阿遠夜麻迹云る子對ハ給へり右子謂ゆる句大
 兄皇子御歌子奴都 等利と詠せ給へるハ真の意の
 佐を冠させ給ハざりなり 秋子野鷄也欲詠雉之發語
 也と見ゆ万葉十三 四下子野鳥と有る右と同一く奴
 都等利の方あり其十六下子 狹野津鳥とのこ云て
 雉の事と為り ○政藝斯波登其年ハ句大兄皇子御歌
 子も奴都等利杖蟻天播等余武と詠せ給ひ皇極天皇
 三年御紀謠歌子鳥智可抱能阿婆努能杖 始騰余謀
 作儒倭例播社始柯騰比騰曾騰余謀須多と有て雉者

△私記ノ師説雅好
鳴ニ欲曉之時也
と見えたりが如し

勤むて寝たり一雉く起出て聲を五時ノ状を云あり
備岐藝斯ハ記傳ノ和名抄ハ雉廣雅云雉和名水
須一云木之野鷄也と有れども古ハ皆伎藝斯と云り
万葉七十五七丁ハ武藏野乃乎具奇哉古藝志と有り他
卷ノ雉と有も皆如此訓べきを今本ノ伎藝須と訓り
ハ古を知ぬありと有が如し其七三十九丁ハ磯之浦尔来
依白浪及乍過不勝者雉を絶多倍と有る此一ハ伎自
之訓べくして伎藝斯の略あり又其雉子登余年と云
ハ記傳ノ万葉三十九丁ハ何時鴨此夜乃将明跡待從尔寢乃不
勝宿者龍上乃淺野之雉用去歳立動良之と有る此も

雉の鳴を夜の明る事云り又十三二十四丁ハ野鳥雉
動家鳥可鷄毛鳴左夜者明此夜者旭奴とし有りしと注
されたり私記ノ等余武呼也鷄雉相鳴也と注せれど
ハ下ノ足日木乃山下響鳴鹿之十五卷二十二丁ハ
之比奇能山此古等余未佐平思賀奈君母其三十八丁
ハ保等登藝須毛能毛布等伎尔伎奈吉等余年流と有
ふと其余よし甚多く有が如し何れも呼事ハ非ず
て鳴く時の○尔波都登理ハ庭津鳥あり句大兄皇子
御歌も亦播都等理と有を釋し鷄也と注されたり
万葉七四十一丁ハ庭津鳥可鷄乃坐尾乃と有て迦都と云
む發語ありと十三二十四丁ハ同ト意トて家鳥可鷄毛
鳴と有ハ和名抄ハ鷄和名以倍八止と有が如く人の

宅内子畜る物亦此バあり本草和名抄子 署類を
和名也未都以毛と云ふ對へて羊を和名以倍都以毛
と有子同ト例あり備右の庭津鳥を天孫降臨章子鶏
を尔波登理と訓み本草和名小本草和名子も其字を
書て和名尔波止利と見え神樂酒殿歌或説末子丹波
止利ハ加介呂止奈幾奴奈利と有り又俗子も然云ふ
るハ古子注る万葉十六ハ子狹野津鳥と云て直子雉
の科と為る子異ふず此將古事記朝倉宮飯子尔波
須受采と有て人家小近き雀を庭雀と云る子同トく
して家庭子棲む鳥と云事あり又神世七代章子如鶏

子と有と始として記記共子唯子登理と訓べき所多
きハ他子某鳥と云ふ對へる物の無き時ハ然訓む事
あり子て世子鳥ハ一も多在れども最人子氣近き物
ありを以て打任せ也然云ふ例あり 右の家
ハ人家コ近きを以て負せたり名あり事此コて知べ
一又本草和名子菟葵和名以倍尔礼と云ひ地層和名
尔波久佐一名末岐久佐と有る類草木子限るず禽鳥
子ても家と云ひ庭と云る物ハ何れも右子同トと知
べ○迦祁波那久ハ句大兄皇子御歌ふし作播都等利
柯誓播雛俱雛架と詠せ給へり記傳子此ハ鶏者鳴下
り此鳥の本名ハ迦祁ありを人家の庭子住む故子庭
津鳥と枕詞子云る事野津鳥と同ト備此二の鳥の鳴

く事を詠給ふハ夜の明るを歎給ふあり取と云れ
 ろガ如一万葉七四十子庭津鳥可鶏乃垂尾乃乱尾乃
 長心毛不所念鴨十一三四十子旭時等鶏鳴成繼患也思
 獨宿夜者聞者雖明又里中尔鳴奈流鶏之喚立而甚者
 不鳴隱事羽毛十二二十子物念常不宿起有且聞者和
 備吟鳴成鶏左倍十三二十子隱口乃泊瀬乃回尔左結
 婚丹吾来者棚雲利雪者零来奴左雲理雨者落来野鳥
 雉動家鳥可鶏毛鳴左夜者明此夜者明奴入而且將眠
 此戸開為と有あど何れも鶏を迎和と訓り何可鶏と
 作らば假字多りけれハ本より抱る可うす後の歌
ハ伊

勞物語ニ夜ニ明けハ狐子食ふて久陀迦和の末き子
 鳴て夫を遣つと有る是あり此ハ鶏の末き子鳴つ
 子故子夜深く出て歸りしけれハ腐鶏の罵り云る子
 可一冠辞考子或人の百濟鶏の意あり可しと云る
 を取し由無し又記傳ニ云く彼繼体天皇御卷皇太子
 御歌ハ彼十三句の次子你播都等利柯誓播鳥儼鳥俱鳥儼鳥祭
野津鳥奴都等利柯繼儀矢播等余武波絶誓矩謨伴麻娜以播三孺
明底阿開你啓梨倭我蟻慕と結めさせ給へり借上の歌須
 比遠母伊麻陀登加詭婆と云處を佐奴都登理云とへ
 読け心得べし語勢ハ阿遠夜麻尔と云處へ係れり不
 ぐし意ハ佐奴都登理云とへ係れり其故ハ板戸を押
 入り引つり左右して時迂りて得入るを給ハさる間

○同十卷廿七下
漢等字枕易字樣
雜音莫動明者雖
明と有と此の意味
似たり

小大乃緒游須比ふとを未解散させ殆ハ十の間
早夜の明つゝと云義あり上引る万葉十二
他國尔結婚不行而大乃之緒毛未解者左夜曾明家流
と有ハ此意を得て取ル者万補と云ルなり。○字礼
多久母ハ記傳引ル書紀神武天皇御卷小慨哉此云于黎
多棄伽夜と見え万葉八三十百枝刺於布流攝云
落許須奈由米登云管幾許吾守物半字礼多伎也志許
霍公鳥曉之裡悲尔雖追雖尚來鳴而徒地尔令散者十
二十子慨哉シコ去霍公鳥神樂蟋蟀本子支利支利須乃
祢多佐字礼太左也云と末子於左万左祢多左字礼多

佐ふと有り此子祢多佐を重云と同一義ありと
神武天皇戊午年御記子慨憤履神天皇前御記子慷慨
と有ふとを祢多年と訓を合せ考可一万葉十八
十九子保登等藝須伊登祢多家口波と有も右の字礼
多伎也志許霍公鳥と其義相似たり源氏子難面
き御氣十の字礼多伎尔と有を始として中昔の書
共子甚多子詞子て慨字允當ルり説文子慨大息也と
得志也と注一礼檀弓疏子中心悲慨然不有て歎り
しき意あり名義故子此字子波宜年又那且久又阿波
礼布又久流志布又伊多年又祢多年又伊伎押富流不
と云訓有て字礼多斯の言無きハ當昔雅文の外子ハ
用いざり。○那久那留登理加ハ鳴在鳥哉あり其閑固
し致りヤ

若て次あり沿河比
 貴年の歌何處
 夜麻比賀久良
 婆奴婆多麻能用
 政伴傳那年有
 其徒一明て給
 二事を尉の聞中
 三事を尉の聞中
 四事を尉の聞中
 見し可し

のたろ戸板を押え引こ為給ひ一程子山子の鷓鳥の鳴
 て夜の甚く更行き然為つて在る間子野子の雉子
 鷓の鳴て徒一く夜の明る事の侘一く御在一坐す
 由を鳥の慨き由を取成させ給へる御句意あり○許
 能登理母ハ記傳子母ハ助辞あり此鳥等余と云むカ
 如しと云はなり○字知夜米許世涯ハ記傳子字知ハ
 打り此ハ例の輕く添云辭子ハ非ず貴子打を云り
 夜米ハ令病ふて打て惱まり苦うむと云り凡て麻
 世を釣りて米と云言の格多一止も令止あり進も令
 進あり浮れ令浮あり屈も令屈あり添も令添あり

此等を以て心得し鳴く事を令止むと云は非ず皇極
 天皇御紀歌子騰帝攀預能柯微乎字智岐多麻須母と有
 る類あり伊努物語子夜に明けハ狐子食ふで久陀鷄
 の末き子鳴て夫を遣つと云歌ハ凡ての様も意も
 全此と似たり許世涯ハ乞望し意の辭もと万葉四十三
 三子君之枕者夢尔見乞五十八字米我波奈知良須
 阿利許曾七十九子目耳谷吾尔見乞十五十一子吾客有
 跡於妹告社ふと猶多く有る許曾と同くて又二十五
 丁子不通事無有巨勢濃香毛四二十子百夜乃長有吳
 宿鴨十五十一今之七夕鏡巨勢奴鴨ふと詠も又十一

○日本書紀傳三十

○九百二十六

今改めし沼河比賣
年の巻歌に伊能知
波那志勢多麻比
曾と有し此御句
對て卷奉れし事
下三十三注を
以知へし者あり

四下恋為道相與勿湯目又三十四絶跡云事平有起名湯
目か不かも詠て許曾許須許世皆一辞の轉れるあり若
て泣も乞望ふ辞よて高津宮段女鳥玉歌に佐那岐登
良佐祢万葉一十七家告用名告沙根又十一小松下乃
草平所核ふと有り又九下九妻社妻依来西尼十
四十九下許余比太尔都麻余之許西祢ふと有し此と
全同ト云れりか如一輕先添思けくハ宇知ハ
令止て其鳥の鳴く事を令止むとふり許世泥ハ
事をも苦さるむの意あり可しと思ひハ甚有
中トき僻説めて有けり今予か至り深うざりハ間
の耻を著して後人か惑ハハ
トと此を書す者あり ○伊斯多布夜ハ天馳使

と云へ係れる發語と聞ゆ備此ハ伊斯伎登布夜の
略して往イ及キ飛ト也ヤの義あり可し仁徳天皇三十年御紀
子天皇遣舍人鳥山令還皇后乃歌之曰夜奔之山呂珥伊
辞及鳥山。往及。往及。阿思。茂思。赴毒。免毒。摩毒。珥往。辞及。枳將。阿
波過。牟哉。伽哉。茂哉。と有る伊辞鷄之鷄を古事記ハ伊斯祁伊
斯祁と有ハ往イ及シけ往イ及シけあり御歌意ハ皇后の御在
ト坐す山背に往イ及シけ鳥山往イ及シけ往イ及シけ吾愛妻よ
往イ及シけ過す之事の有むとあり此御詞ト依て思ふト次
あり天馳使ハ鳥の馳飛之事あり其鳥の飛ぶトハ
一群ト群がり競ひて我もト後れトト互にト相及

く物あるが故に此の伊斯を以て伊斯伎の略なりと
ハ云あり 記傳に伊曾伎飛やて云ふや伊曾伎を約
めて伊斯と云ふ又輕太子御歌に阿麻陀牟
と有も天飛ふれば多布と謂つ可しと云ふなり右
の伊辭鷄を叙ふ急也と注されたり其急くと云ふ
及く義ありハ違へる非ず中古の書共々伊斯久も
云ふと云語の有も此の伊斯伎と本ハ一なりと思え
たり ○阿麻波勢豆加比ハ記傳に天馳使と聞ゆ遠飛鳥
官段輕太子御歌に阿麻登夫登理母都加比曾多豆賀
泥能歧許延年登歧波 將聞時我名可同 有を思ふ可
しと云ふなりハ然る言あり備 和名抄御名 伊勢國朝明郡杖
部 加倍 安房國長狹郡文部 波世豆 有り又姓氏
錄 左京皇別下 文部天足彦國押人命孫比古意都豆命之

後也と見え又 石京皇別上 杖部送孝元天皇皇子大彥命之
後也と云い又 和泉國皇別 杖部首武内宿禰男紀前宿禰之
後也とも有り又 山城國神別 文部縣主同祖鴨建玉依彥命
之後也と見えたりハ馳使と云事を以て夏子姓氏不
り其其氏人の住らぬ依て地名とも成れりと見ゆ新
レバ此の天馳使と云ハ幽顯未分れざりハ以前ハ
鳥多とを使と為て神事のみ相通ハ一給へる事の
有けむら其事を宣ひ出さ給へるありけり備此
ハ八千文神の御身自其御妻問し御在り坐たりけれ
ば其天馳使の事ハ宣はさざり有べきと云ハ夜斯麻

久尔都麻麻岐也泥立登富登斯故志能久送送云云
御句を置給へり対へて天馳使の状も遙々と天翔
り國翔り爲て御在り坐けり御心の深きを如此御言
ふ出させ給へり御事と見えたり此よりハ後の事
多れども天孫降臨章ハ雉を御使として天降り給
へり事見元神武天皇戊午年御紀ハ天より頭ハ咫
鳥を遣せ給へり御事の御在り坐ハ更東多事とて又
古事記御天降段ハ天鳥船神 副建御雷神而遣と有
り天上より御使ハ御在下坐たり御使の名あり又鳥
之石楠船神亦名謂天鳥船之見え又播磨風土記ハ仁

德天皇御世子船を令造りけたりを其迅如飛一撮云
越七浪仍号速鳥と有ふと船七使爲る物あり故ハ
鳥を以て号りけたり事傳廿八 丁小注をを見せ知
べし是亦天馳使の傍證とも心得べき事ありハ一應
神天皇御紀ハ冬十月科伊豆國令造船長十丈船既成
之試浮于海便輕之疾行如馳故名其船曰輕野と有て
疾行如馳云義 予て輕野と号給へり故ハ古事記輕太
子御歌ハ阿麻陀牟加流乃袁登賣と有る統きを万葉
子多く天飛也輕と係たり但此ハ例共ハ依て試ハ云
の○許登能ハ記傳よて三言一句ありハ有つ上より
次ハ云下セハ事を云ふハ此以下三句ハ次ハの御歌
ハ二所下卷朝倉宮段の歌ハも見元て皆其歌の

意ハ抱くず唯一首の終ハ縁ト云々語ありト有り
○加多理其登母ハ記傳ハ六言一句あり語言ト母
ハ余ト云む如ク凡て古歌ハ母ト子助辞多ク其
ガ中ハ後世の格トハ異あるケ數多有りト云レ知リ
此御句を打返して許登賀多理ト云ベシ万葉九十八
丁ハ家帰而父母尔事毛告良比十二丁ハ徑船乃過而
應來哉事毛告火ト有ル此二ハ所あるノ加多良比ト訓
む例あり十一丁トハ吾意之事毛語名草目六君之便乎
待八金手六十八丁トハ多豆佐波利宇奈我既利為氏
於母保之吉許登母加多良比那具左年流許己呂波安

△云々ト語云事
如此ト云事トて
上ノ下ト述給ヘ
高ト終ルハ辭
ノ俗文ト語末
ト如件ト云々似
ル

良年乎子ト有リ依テ思フハ許登能加多理其登母ト
云二句ハ其思ハキ事情ノ消息を言小述テ語り聞
元々ト申テ次ト有リ皆然リ此トハ事異あり
下多ク柿本朝臣人麻呂歌集曰ク有ル長歌の結句ト
百重浪千重浪數ル言奉為吾ト有リ意味相似ト
○許登婆ハ記傳ハ三句一句是をバト即此御
事問の事を云ふト云レハ此トハ然ハ非可決ク
多クも然トて皆人ト詠係ル時ト在ル事トて己ガ心
遣ト獨ハ言ト云時トトハ絶テ右件ノ三句を用フ事無

伊斯多
布夜以
下廿四
字宜剛

を以て味ハひ見ろ可き事ありり一
の如く此歌の傳り往て今此事ハ遙け
故事の語言ハ不為ふいと云程の意あり可しと云ル
たゞハ決り當
くざる説あり

記傳ハ此結の五
句ハ故言通二使
後世まで
可しと云ル

尔其沼河日賣未開戸。自内歌曰。夜知富許能。迦微能美許等。
奴延久佐能。賣近志阿礼婆。和何許許呂。宇良須能登理叙。伊
麻許曾婆。知抒理迹阿良米。能知波。那抒理尔阿良牟遠。伊能
知波。那志勢多麻比曾。伊斯多布夜。阿麻波世豆迦比。許登能。
加多理基登母。許遠婆。阿遠夜麻迹。比賀迦久良婆。奴婆多麻
能。用波伊傳那牟。阿佐比能。惠美佐迦延岐豆。多久豆怒能。斯
路岐多陀牟岐。阿和田岐能。和加夜流牟泥遠。曾陀多岐。多多

岐。麻那賀理。麻多麻傳。多麻傳佐斯麻岐。毛毛那賀尔。伊波那
佐牟遠。阿夜尔。那古斐岐許志。夜知富許能。迦微能美許登。許
登能。迦多理基登母。許遠婆。故其夜者不合而明日夜為御合
也

此ハ沼河比賣命の答ありり此中の中子上の如く伊
斯多布夜阿麻波世豆迦比許登能加多理基登母許遠
婆之云界有て此子て断て次ハ阿遠夜麻迹比賀迦久
良婆之云御自より起りけれハ全く二首あり事論
無一然ハ有れども伊斯多布夜阿麻波世豆迦比之云
事ハ佗より遠く御在し坐けり夫神の御上子てハ實

乃騰遠依子等者三四十五乃名湯竹乃十縁皇子と有ハ
弱竹カクの如く挽依ると云ニ統カクきまを全此と目十状不
る者あり源氏桐壺七目見ふとも甚カクげふて甚
ニ那用那用と我々の氣カクきよて臥たれどと有と或我々
生得更衣の体の和カクり子挽カクと為たり人あり可
と注一帚木ハ子白き御衣共の那用あり直衣を
うりをシドけ無く着成し給ひて紐もども打捨て添卧
給へる云々と有と那用と加を扱カクり和カクりありあり
と注一又四十人けりの多遠夜岐たり子強き心を強カク
て加へたれハ弱竹の心ちして然カクすが子折べくも非

論語子華如之風
必復と有り優カクシ
をハ奴延布須カク有
り弱伏と見て明
りふし

ず云ニ柳十九小若く即在し坐す内カクも柳心那用昆
たり方と過て強き所御在し坐ぬあり可し云々とも
有て強き小對へたれハ弱又ハ柔字あり當れ
とハ此の奴延久佐を那用久佐の義と見ふふい叶ひ
たり可き但那用久佐と云々事ハ外カク見當るざれば
三十九下子蘆垣之中カク似兒草カク尔故余漢我止咲為而
人尔所知名と有カク似兒草ハ假字カクて嫩草の義あり
けれハ此カク同外カク可カク那用カク加カク那基夜カク加カク那陀良
加又右の尔故余漢ふと大抵カク同義の言ありけれハ
押直して其意カク○賣迹志阿礼婆ハ女迹在者あり此ハ
嫩草の如き女子一有けれハ争カクハ聞ゆカクハ非ハ
と云々を會カクて下カクふカク伊府評書婆云々能知波云々

へ應く所ありければ此助辞の志字子大小力有り○
 和何許々呂ハ我心あり古事記明宮改大御歌なり
 和賀許々呂志伊夜哀許近斯兵とも詠せ給ひて凡て
 句の頭子此語を置くハ下子其意を述しと為す在時必
 事子て歌文共子同ト事子り己子傳三二十子注り
 が如く此正書子吾心清之之と有る御事攀更子て
 出雲風土記子吾御心者安平成の御言を始として吾
 御心云々の御言共多く日代宮改倭建命の御言も
 吾心恒念自虚翔行然今吾足不得歩成富藝斯形と詔
 へるあり歌攀べる歌詞あり万葉十二二小我心等望使

念又六吾心天津空有土者踐鞞ありの類子て何れも
 同ト格あり其十三卷三十一丁子我心盡之山之十五
 有ハ發語ありて彼神功皇后元年御紀子謂ゆり
 御心廣田國御心長田國の例ふルハ此と異あり
 ○宇良須能登理叙ハ浦渚之鳥なり此子其大綱を
 云て次を千鳥と浪鳥と分て其は奉ら可き意味を
 申せりあり記傳子浦渚之鳥とハ万葉六四十納渚あり
 尔波千鳥妻呼葭部尔波鶴鳴動と詠る類を云ふ又七
 丁十四子圓方之湊之渚鳥浪立巴妻唱立而邊近著毛十
 一三十四子大海之荒磯之渚鳥十五十四子武庫之浦乃伊
 里江能渚鳥十七三十七子伊美豆河泊美奈乃能須登利

安佐奈藝尔可多尔安佐里之思保美底婆都麻欲比可
 波須又^{四丁}美奈刀尔波之良奈美多可弥都麻欲夫等
 須騰^理波佐知久尔此等之渚鳥ハ一の鳥名の如くも
 聞ゆれと今此の歌詞と照して見れば唯洲ハ在鳥亦
 可一又十四^{三丁}子波麻渚押理とも詠り借是迄四
 句の意ハ我丈夫ありせば加此も有^ト子^トを女之事
 多れば浦渚ハ立騷ぐ鳥の如く心の左右ハ騷^テ平
 和^リの如と云意あり^取と云れば今思ふ^ト

吾ハ嫩草の如き女^ト在^ルハ^忽美引^ヘ子思^ノ未足^クナ
 我心ハ浦渚之鳥^ト次^ニ二句を
 起す科^ト置^レた^ル然^レ此^ト一^種の鳥^ト見
 鳥^ト云^フ或^ハ説^ハ右^ノ渚^ノ鳥^を十一^卷四^{十七}下^ノ水^沙
 児居^諸座^船之^十二^卷四^十下^ノ三^沙吳^居諸^ノ尔^居舟^之
 又^十六^下ノ^三佐^吳集^荒磯^尔生^流ふ^どの^歌ハ^依て^鳴
 鳩^ノ事^ト云^フハ^非あり^可一^種の^鳥鳩^ト○^伴麻^評曾^婆ハ
 と云^フ右^ノ渚^ノ鳥^ノ中^ノ一^種の^鳥○^伴麻^評曾^婆ハ
 次^ニ能^ク知^レ波^ト云^フ對^シて^其浦^渚之^鳥と云^フ事^ノ始^終
 を^此ハ^断じ^るあり○^知杼^理迹^阿良^米ハ^千鳥^尔在^ルハ
 り天孫^降臨^章第六^ノ書^子豊^吾田^津姫^恨皇^孫不^與共
 言^皇孫^憂之^乃為^歌之^曰憶^企都^茂幡^陸尔^幡譽^反耐^母

佐祢耐掇我阿黨播怒不既茂譽播磨都智耐理譽千鳥と有る
此御製の義を思ふ奥津藻の邊に寄る事も有れど
眞寢床に御交合す御事の出来させ給はざり御有状
ハ濱に千鳥の如しと歎き聞えさせ給へりよて此御
歌ハ濱に千鳥の相乱れて一群キ事難に寄せ
て詠せ給へりあり此に就て其千鳥の例を見り古
事記日代宮段倭建命の於是化八尋白智鳥向濱飛行
と有る其時の歌ハ波麻都知登理波麻用波由迎受伴
燕豆多布傳と有る左右左に群がり難き由に見え又万葉
三十八ハ淡海乃海夕浪千鳥と有る浪に逐るるを云

ひ六十二ハ上邊者千鳥數鳴十一三四十ハ可旭千鳥數
鳴亦ど有と數鳴と云も騷ガ一キ状あり此等をして
考ると千鳥と云ハ多く群聚ヲ謂ハ有れども鴈鴨
の如く一ニ寄合ニ事ハ難くして立つ居つ乱れつ騷
ぎつ所を定めざり者ありければ此も未遇ひ奉り難
き事を今ころハ千鳥に在つと其鳥に比へて申給へ
りよて右の大御歌の眞寢床に能ハぬ哉よ濱千鳥よ
と有る其意味大に相通ひてあむ有けり記傳ハ此ハ
鳥を承たると云ハ今ころハ浦渚の鳥ありて云
意ふるを歌の調然ハ云難キ故に言を換て千鳥と云
云り此鳥即浦渚に在て騷ル鳥あり事右に引る万葉
六卷ハ浦渚ハ波千鳥妻呼と有る歌ハ如くふれハ不

りて云ルハ ○能知波ハ後者子三 言一句あり
季一りるず ○那栴理尔向良年遠の那栴理ハ右の知栴理子對
ルハ此も鳥名あり然ルハ匹鳥の義子一て鴛鴦と
を云ふころハ有けぬ孝徳天皇大化五年御紀子耶麻
駝播尔鳥志賦拖都威底陀虞速好預所速俱陀虞陸屢伊慕乎
多例柯威率尔雞武と有と釋子凡歌意皇太子英造媛如
鴛鴦 相雙之處造媛去逝之由也と注し和名枚子鴛
鴦雀豹古今注云鴛鴦和名 雌雄未嘗相離人得其一
則其一思而死故名匹鳥也とも有て鳥志と云ハ愛字
の義子一て相愛しむ事古今子異無ルハ匹鳥ナドリと云むも

強事ハ非り可きを猶万葉三五十子愛八師妹之有
世婆水鴨成二人雙居手折而毛令見麻思物乎五五子
尔保鳥能布多利那良賦為加多良比斯許と呂曾年企
五十八二十子比毛能諸能移都我利安比互尔保騰里
能布多理雙生と有て鴛鴦ハ更あり鴨又ハ鸕鷀
の類九て水鳥の類ハ雌雄相率る者ありけルハ共子
右子謂ゆハ匹鳥ナドリあり事推て知べし若て此の意ハ我
心ハ浦渚之鳥ありと始て先其譬より物を云置て
今ハ千鳥の如くして群寄り難し後子ハ匹鳥ナドリの如く
相偶む奉らむと今夕ハ過すして後夜子ハ友寝せむ

事を諾ぐひ申せり義にて其巧妙なる事實子驚くも
 堪たる者ありり一記傳の事平和あり今世
 加ても那抒理と云はるは其那抒ハ能抒と通ひ
 て能抒加と云はるは同ト事万葉十三子吹風母和者不
 吹と有り諸歌ハ調を首と為る故に上ハ知抒理と對
 へて那抒理と詞を疊たる者あり斯ハ此四句の意
 今ころ難逢くて如此浦洲の千鳥の如く驢ぐと云
 後ハ必逢見て心の平和を主と為ると云はるは云
 れたれども甘ひ難ハ調を主と為ると云はるは云
 二物名の對ハ平和の言を鳥名と混して強て對
 へむ事ハ後世の拙き歌ありはこ然と有あり此ハ
 上ハ浦洲の鳥を云て其成行きを千鳥と匹鳥と比
 へたる所が即歌の調と云者あり事を思落さる
 ありけり但甚匹鳥を此の那抒理と當て那ハ匹偶の
 義有やと云む物有れば名有り又名有れば物有り
 是名と實と相並べり義あり又食有れば射有り是食
 と相並ぶ義あり此を以て其余を推て知べきあり又
 其匹鳥の正字を名義抄に登母とも布多都とも如互

こも米具流とも那良夫とも阿都とも多久良夫とも
 登母賀良とも比登許呂倍理とも岸良とも比登志と
 も多具比とも訓ハ匹偶の〇伊能知波那志勢多麻
 意を釣つて那とも謂つ可一
 比曾ハ命者莫殺給ひりて此命ハ夫神の御歌子鷄
 の夜深く鳴ると雉の朝未き子響むと鷄の平明と鳴
 りと此三鳥の事を擧て許能登理母字知夜米許世涯
 と詔給へるも對へて其を莫殺せ給ひると留め申せ
 る意あり其徒しく明つる事を歎らせ給へるを慰め
 て阿遠夜麻途比賀迦久良婆奴婆多麻能用波伊傳那
 年と云て今夕明ぬとも翌夜と逢奉多可き申を述べ
 るも合せ曉る可一記傳ハ此歌へる意二子聞の
 一子ハ後子ハ必逢見べき程子其

時すて死す長く人て待給へと云ふりニハ今夜逢
見ぬ事を深く慨して悲死給ふと云ふり云々云
此ハ此ニ共ニ大己貴神の御命の事と為るれ
死ふと一應ハ然る事不_レ^レ熟思_ニ然許_ノ事_ハ悉
死ふと為るハ後世唯淫犯の故_ニ身を廢_ル人_ノ
此_ハ有_レけ_ル如_ク何_レ其_レ御_レ情_ヲ深_ク御_レ在_ニ坐_セバ_ト
て其_レ女_レ神_ノ為_レ御_レ命_ヲさ_ヘ係_サせ_給ハ_ハ國_ノ作_レの_レ御_レ業_ヲ
在_ニ坐_トリ_テ其_レ上_ニ女_レ神_ヲ婚_ビ給_フハ_ハ國_ノ作_レの_レ御_レ業_ヲ
継_グ給_フ可_キ御_レ子_ヲ令_シ生_給ソ_ハ御_レ事_ヲ其_レ淫_ノ籠_ニ
の_レ為_レ御_レ在_ニ坐_サル_事申_サル_更ふ_レハ_ハ後_世の_レ意_ヲ
見_奉り_テハ_ハ違_フ所_ニ○伊_斯多_布夜_阿麻_波世_豆迦_比
多_見多_在り_テめ_可き_○伊_斯多_布夜_阿麻_波世_豆迦_比
許_登能_加多_理基_登母_許遠_婆の_レ此_五句_廿四_字の_レ此_ハ
在_テハ_ハ女_レ神_ノ歌_ハ似_氣無_キ由_有ル_事ハ_右ニ_注ス
ガ_如く_ハ八_千矛_神の_レ御_レ歌_ハ伊_斯多_布夜_と有_ル天_馳使_と
と_云む_發語_不ル_子て_其天_馳使_と云_ハ其_夫神_ノ遙_ク

と馳使の如く遠く御在し坐けり御事を詔給へり不
りけれハ此ハ女神の居ありしハ然る事を歌ハ
せ給へりむハ大ニ其意味ハ合ぬ所有べし然る時
を右の二句を去て次の三句のこゝを其結を成せり
やと見ろ事足らず故其語の読キと意の通る状と
を試ろ小右の伊能知波那志勢多麻比曾の句にて夫
神の許能登理母宇知夜米許世泥の御句の答と成り
次多阿遠夜麻迹比賀迦久良婆奴婆多麻能用波伊
傳耶牟云々八直ニ直る時ハ其打合病乞泥と詔給へ
る三鳥の為ニ空しく明させ給へり御事を慨たし給

へる御意を慰むの聞ゆ事と成て語の調ひも且
く意の貫く状も甚明なりありければ右の五句二十
四字を去て一歌と見る事む然る可かりけり 右九百三十一
丁引る言史徴伊斯多布夜以下の五句二十四字ハ前の八千矛
神の御歌あり五句の如何しての錯れて此歌の紛り
重なる者あり云るハ実ハ然る言あり但右ハ説
ガ如キハ予ガ新ニ發明むる所有て相攻て此ハ云
如キ説ハ有ヤ無ヤ然ルハ○阿遠夜麻近ハ右九
杜撰ニ出テ其説を成スルハハ
十九子出○迦久良婆ハ日之隱者あり此ハ下文ニ故
其夜者不冷而明日夜為御合也と有る明日の暮る事
を云ふリ記傳ニ迦久良婆と云へきを迦久良婆と云
ハ古言の一格あり此格ハ迦久良年迦久理迦久流と

活用くあり」と注されて其引れは朝倉宮段大御歌
ニ表登賣能伊加久流衣加哀近飛鳥宮段大御歌ニ阿
須用理波美夜麻賀久理兵推古天皇二年御紀歌ニ和
餓於明春弥能訶旬理摩須万葉二八丁子鳥玉之夜渡
月之隱良久惜毛五十六丁子波流佐礼婆許奴礼我久利
五十四十九丁子宇麻具多能祢呂尔可久里為十五九丁子海
原午夜蕪之麻我久里又十二丁子由布左礼波久毛為可久
里奴十七五丁子久母我久理可氣理伊尔伎等亦と有
て其外ニ隱字を書きも然則ハ可き由己ニ傳十百九十六
丁ニ注るガ如ク又儀式追儺祭文ニハ撰心氏留里

此歌よりハ千文神
の御歌ハ奴婆多
麻能久路岐美祁
斯遠と有テ皇の
矣語ヲ置テ終ハ
具例ハ

加久良 波と有テ本より古言の傳ハれ多クあり○奴婆
多麻能ハ夜と云む料の發語より雄略天皇十三年御
紀歌子農播施摩能柯彼能矩盧古摩と有テ私記子師
説鳥扇之賢也其色黒人喻之言欲説黒之發語也と有
テ本此子起ル者あり故記傳子或人鳥扇の葉ハ羽
子似たり故子此草を野羽と名け其実を野羽玉とハ
云ふりと云ふ可耳一信子鳥扇と云ひ又槍扇と云
ふ葉の羽子似たり由ありと有テ其説を盡され
たり者不レテハ説ハカ異テ下ニ云ハ今例を試テ冠辭考子此發語より續
けり物を舉ルルハ有リと雖モ実ハ唯この有り其一ハ黒ハ係ル多あり

今六子黒玉之我去
髪半又ハ夜干玉
之妹黒髪

万葉二八子奴婆珠乃吾黒髪四二子野干玉之黒
髪七八子烏玉之吾黒髪十一五子夜干玉之黒
髪色天十三三二子烏玉之黒馬十六一子烏玉
之斐太乃大黒十九十三子奴婆多麻能黒髪変と有
ハ鳥扇の實の黒き由子續けたり其二子ハ夜ハ係ル
あり二八二子烏玉之夜渡月之四十九子夜干玉之黒
馬之来夜者又八五子野干玉詠昨夜者令還五十一子奴婆
多麻能用流能伊昧仁六七二十子烏玉乃夜霧立而七四
子烏玉之夜渡月半九十三子烏玉乃曾度月乃十一十九
子烏玉之毎夜君之一云夜二十八十子奴婆多麻乃

三四子烏珠之其夜乃梅年

又行黒玉之玄髪山半九行黒玉之久福年

又行烏玉詠暮年三老

轉りて聞き意を
夜に宿るに有
る是なり

欲流乃伊刀末仁と有ふハ新詳考に在る黒きと云なり其鳥扇の實の黒色ふも
比へて夜の空を觀象ミクサテたると右の二の正格にて
餘ハ其轉ある者なり 循此より月も夢も寢も
妹も續けたる共ハ十七三十一子奴婆多麻能都奇尔年
加比兵と有ハ月夜の物なればあり十一二十子黒
玉夢不見十二三十一子鳥玉彼夢見十七三十一子奴婆多麻
乃伊米尔波母等奈ふと有ハ考ハ夢ハ夜寢て見る物
なれば夜より轉れりと云れたる如ハ十五二十子
奴婆多麻能伊母我保須倍久と有て妹へ続けたる右
子引る十一十九子夜干玉之妹之黒髪と有が如く女

ハ殊ハ髪之美しきを愛する物なれば此ハ黒より轉れ
る者なり 循右の如く状ハ書中子野干玉と書る
ハ射干の音通ハマテ和名抄ハ狐考聲切韻云狐和名木
豆称
獸名射干也關中呼為野干干語記也と有る是より夜干干
玉ハ典藥寮式ハ夜干と書されたる是右の野干と同
音なりを以てあり子同ト又鳥珠鳥玉の鳥ハ鳥扇の略
本本草和名ハ射干揚玄操云上音
夜下考寒反一名鳥扇一名鳥扇
一名鳥扇仁諧音
所甲反一名鳥吹一名草姜一名鸞尾葉名也
出陶景
注一名鸞頭根名也出
蕤敬注一名鳥喙出雜
要决一名鳥屨出兼
名苑和名
加良須阿布岐と有ハ同書鳥頭の下に出る鳥喙を陶景注云鳥頭阿岐即名

合けし但傳世六十
注しを語拾遺河
神の御教は鳥扇
扇之有り扇は
指羽團の打羽
羽を扇羽と云
るは此の射干
の羽を易て此の
射干の羽と云
は鳥扇其の射
干と訓す可
若て此の射干
云い

鳥喙と云い又陶景注云似鳥喙故以名之有ふ取合せて思ふ葉の岐れたる状實は鳥の喙
を開くは似たりけし此を以て鳥と云字ハ出来り
又扇と云ハ其疊重なりたる見立ありを思ふ此加
良須阿布岐と云和名ハ字子就て後子成れ物ハ
て奴婆ハ滑葉滑葉ハの義ハ此射干の古名あり其
形恰も玉の如くありを以て滑葉玉と云るを其色
依て黒と云む發語ハ置る者ありけし
羽と云ハ野羽玉と説く悪くハ非れど羽と云ハ
猶漢名の鳥扇の説を免る事能ハ且又本草和名
子鬼白一名爵犀一名馬目毒公一名九白一名天白解
毒一名雀頭一名雀草一名雀辛和名奴婆乃美と有ハ
本草家ハ山荷葉とハ善母草とハ唐婆鏡とハ橘田草
とハ羞天花とハ獨荷草とハ云物ありを本草ハ羞天

八千の古名奴婆
然れども本草
五葉白根射干
而味甘九相連有
毛者良故名云
又二月八月取根
云い又時珍曰鬼
根如天南星相疊
之狀也云い其
用之ハ非ず
其根の天南星
相疊れ射干
の葉ハ似たり
けし然して色
白き其形ハ相
似たり有け

花紫紅色朝東向暮西頭と有て和名ハ麻波理と云
ハ日子隨ひて廻り謂て花子因れり名あり又俗
ハ奴那能美と云由あり其奴波乃美の轉あり可
ハ此称ハ一其實の形射干ハ似たりありて号け
たり者あり可若其此と実の狀の ○用波伊傳那
能相似たりむハ愈射あり事著し
年ハ夜者持出でて此ハ下子明日夜為御合也と有ら
其翌夜の事を云あり即八千矛神の御歌子遠登賣能
那須夜伊多斗遠於曾夫良比和何多多勢礼婆比許豆
良和何多多勢礼婆云と有を許し奉るすて今夕
過して翌夜内子迎入奉るむ事を申せりあり記傳子
此ハ閨より起出て戸を開きて入奉るむと云意して
將出とハ云あり出て外にて會むと云ハ非ずと云

此たゞハ然る事あり此ハ沼河比賣の將出と云ふ
て次あり朝日之咲来而ハ其夫神の来坐す事とて此
對して出會ふ事可きを具し聞え奉れりて其妙あり趣
ハ一も言語も難云き程の味有る事共あり先ハ
出と云夜ハ月神を一月夜見尊と申し奉る夜とて
月者將出の義ありとも思ひしりとも其ハ甚拙なりけ
り此ハ女神ハ内より出て迎入奉る夫神ハ一も外
より御在し坐て此を妻屋として遇せ給ふ可き由を
申せりか歌の巧妙ありとも有けれ縦や夜と云ハ
月の事あり調を失くる此ハ其句有てハ詞ハ遊子所有
て妙あり調を失くる事あり有けり○阿佐比能ハ朝日之て咲り榮
りし係り發語より祈年祭詞大忌祭詞風神祭詞等子
朝日能豊逆登ルと作るを月次祭詞大嘗祭詞太神宮

月次神嘗等祭詞出雲神賀詞等子ハ朝日能豊榮登ル
と有る是正字より筑後國神名帳ハ朝日豊盛命神
暮日豊盛命神と申すも所見たり○惠美佐迦延伎臣
ハ咲榮来而して此ハ女神の已命の事ハ夜者將出と
申してハ子神の明日夜御在し坐て遇給ふ可き由を
契聞えさせ給へり御事ありハ咲榮の言を更し置ル
たろハ其夫神の宇礼多久母那久那留登理加と歌ハ
せ給へり御心を慰め聞ゆる所ありければあり記傳
ハ源氏物語末摘二十子未黎明マデけれと雪の光ニ甚し
清く子若く見え給ふを老人共咲榮えて見奉る葵九

子 上達部ハ甚異ハふク一折ノ御光ヲハ押消レたコの
 リ云ク御隨身共モ形姿耀ク調へて世ヲ持崇メづル
 子 状木草ト靡クぬハ有トトけテあり云ハ嗚呼ガお
 一けテあり賤夫迄ハ已ガ顔ノ成ハむ状ヲをハ知ラずテ咲榮ス
 元ナり明石ト二十ニ日漸ニ指サりて朗ク見奉ラすヨ
 里リ老ト忘レれ齡延ス心チりて咲榮ス先ハ任吉神ヲ
 且ニ拜奉ス胡蝶ト五ト治ス詮有ト何ノ差別ト知ルぬ賤ノ
 夫ト御門ノ邊隙無キ馬車ノ立處ヲ交りて咲榮ス聞ク
 けり總角ト五十ト打濕り濡給へト勻共ハ世ノ物ヲ似シ
 ザ艶メて打連給へトを山賤共ハ如何ハ心惑ヒも為ス

此より次多麻那
 賀理麻多麻傳多
 麻傳佐斯麻岐係
 へる事

子 む女ヅ日頃細言ツケヤキつう名残無ク咲榮スえフ御
 座引簞ハふトすあト見多クたり竹取物語ハ咲ヒ榮ス
 ちてトも有リ意ト有リ世ト朝日影ノ白ハ咲ヒ榮ス兼ハ
 人の容儀ノ限終ク蕭美キきヲも然ル云フ此ハ榮ヒ切ル
 源氏物語ハ人の形ノ見所有テ殊ニ佳キと出ス
 榮ヒすハあト云フ是ト同ト記傳ハ人の喜ビ咲ヒ榮ス顔ハ
 の榮ヒゆハあト云フ有リと顔ノ榮ヒゆハ云フ事ハ
 何カ多ク久ク豆ノ怒ル能ハ榜網ヲて白ク云フ發語ヲあり此
 事ハ傳ハ十九ト二百ト廿ト二百ト七十トあト小季ノ一ト注セり○
 斯路伎多陀年伎ハ白腕アリ次アリ須勢毘賣命御歌
 子 多ク久ク豆ノ怒ル能ハ多陀年伎ト云フ御句ハ有リ此ト同ト例ヲみル
 又仁徳天皇三十年御紀大御歌ハ兔根生ル山背之言呂サ

日本書紀傳 三十

〇九百四十五

ハハ腕子纏と云
ニ事有る知へ者

云りければ其
色く白くして清く
御事下事たり垂
置る者

謎能許^本 玖波茂知子^{大根} 智辞於^根 朋泥^根 泥士漏能^根 新漏多^根 娜^根
武杖^不 摩箇^不 儒鷄^故 廢虛曾^不 辞^不 羅儒^不 等茂^不 伊波梅^不 办^不 有^不 有^不 此
腕の事ハ瑞珠盟約章子出た多ト就て傳十五^{九百十}
ト已ト注せり此ハ白腕の例を擧るの事^{中ト右ト目ト杖ト頭ト} ○阿和由岐
能ハ沫雪之よて弱ト云む發語あり此事ハ傳十五^百
五^十ト引る其所子引る和名抄ト日本紀云沫雪日
本紀云^{阿和} 其弱如水珠ト有ハ私記ト沫雪是雪之脆
弱者也其弱如水沫ト有を抄出^レ けた者ありト是
雪の脆き^を 沫ト号け弱ト云ニ事の據あり ○和加
夜流年程速ハ次あり曾多ト伎多ト伎子應く御句不

リ備和加夜流ハ和加由流トて雪の脆く消返る意を
亭トして物の若返る事ト續け^レ けた多ト出雲神
賀詞ト若水沼問能 弥若殿^尔 御若殿坐ト有ハ水の漏
返る事ト寄せて若ゆる申を賀たると此の統ト状同
ト云ら可くして記傳ト弱やうあり胸をト云か如
ト云れたる是あり斯て此ハ万葉二^{三十} ト玉藻成彼
依此依靡相之孀乃命乃多田名附柔層高平劔刀於身
副不寐者烏玉乃夜床母荒良無ト有ハ柔層を夜波波
陀ト訓る即和層^ニの義トして若層ト云むか如ト和名
抄ト海藻和名近木米俗用和布ト有ハ和布ハ即万葉

十六二十七下ノ雅海藻ノと和海藻ノとも作る物是なり此
を以て弱ワカやるとハ柔ニや々ニあり義を明ハむる時ハ
右ノ柔層ハカダ即弱層ワカダあり事ハ知ルるなり猶催馬樂貫
河ハ奴支加波乃セ乃也波良多万久良也波良加尔
奴流典波奈久天於也左久留川末と有も柔平枕ハて
身体ノ事ハ柔ニとも和ニやるとも弱ワカやるとも云ハ男女
相疎スする就て称譽ヲなり謂ハなりハ記傳ハ曰クて和
本ハ物ノ未成固クなりぬ意ハなり固クなりぬハ轉リ
て柔ニなりぬ未成固クなりぬ意ハなり其意ハなり人ハ齡又草木
あり諸沫雪ハ連レく意ハ脆クて固クなりぬ方ハ歌ハ意
を柔ニなりぬ美ニ方ハなり云ハて注スる方ハ歌ハ意
今此説ハ成セる者ハなり故右ニ引ルる柔層ノ柔字

今より句大凡皇子
沖歌子摩左意遠
羅多々在阿彌塔
梨々有る多企と
右と同一事

を名義抄ハ夜波良加尔ト和加志トも云訓有ト猶
其柔ニなりぬ物ハ和加某ト云ハ例ハ詩ノ扶菴又扶
昏ニ和ニ加記ト訓ハを注スる小本ハ也ト有ル其ハ新樹
ト和ニ加延ト陀ト訓ハ又弱枝ト又書リ嫩葉ト又新葉ト和
加波ニ訓ハ或ハ藥ト知ル加婆ト又嫩苗ト和加那ト閑ト又
弱草ハ若菜ノ類ハ或ハ幼竹ト又右ニ云ハて逆ハ岐ト米ト和加米トの
類ハ何ハ初生ノ柔トなりぬ云ハて斯ハ類ハ攀ルるト
違有ル○曾阮多伎ハ徐叩ハて遊仙窟ハ拍擲ハ奶房間ハ摩
津解ハ子上ト有テ乳房ノ間ハ打叩キ物ハ得ルも云ぬ邊
を撫摩スと訓ハ義同トて其ハ交合ル事ハを云ふ
り此多ク伎ハ己ト傳ハ七ハ百ト下ノ注スるハ如ク八洲起元
章第五ハ一書ハ遂將合交ハ不知其術ハ時ハ有ル鶴鶴飛來ハ揺
其首尾ハ二神見而學之即得ハ交道ト有ル此事ハ依テ鶴

鷓子庭多伎と云名有ハ朝倉宮段大御歌子麻那婆
志良哀由岐阿閑と有ハ右子搦其首尾と見えたり意
して其一名を庭多伎と負り所以是あり大和物語
俊子歌子真夜更て箱負鳥の鳴けりハ君が叩くと思
ひけり哉千載集物名子近波多伎を真夜衣返す詮
無き身子ハ唯君を恨て袖不濡ぬと拾遺愚草と然
ぬなり霜枯竟る草葉を先打拂ふ庭叩哉夫木集子女
郎花多在る野邊の庭叩祥事人勿教へるふと見
元和玉篇子鷺字を石多伎と訓るも同物子て其多
伎ハ此子曾陀多岐多岐と云ふ状子甚能似たり

けり子因れり名ありとも思合す可し曾陀多岐の曾
事を緩く和やるとあるを曾と登とも曾と理とも云
ハ此曾ありと云れたるハ然る言子無徐字と當たり
諸右の遊仙窟子摩率禪子上と有る意を此子ハ頭ハ
て云子事ありと云れり隠して詠せ給へり見え
て神世人代程ハ隔れ一と雖も事の状の似通ひたり
事あり右の禪子名義抄子久煩と訓て即陰門の事
あり催馬樂律の陰名子久煩乃名哀波奈尔止可年布
云ととも見え名義抄子関字を久煩とも都毘とも訓
たり○多岐麻那賀理ハ記傳子胸を叩つし交子抱
くを云ふと云れたり多岐ハ右の阿和由岐能和加
夜流牟泥遠曾陀多岐多岐と読み麻那賀理ハ拱在
おて上あり多久豆怒能斯路岐多陀牟岐より言を隔
て受たり故須勢理毘賣命御歌子ハ阿和由岐能和

たつと字鏡下原
関也久保と云ひ

其阿藏播梨の言
 阿那波礼理又麻
 堂布と訓て纏の
 の義有り字鏡集
 訓字を阿那波
 理と訓て支那字と
 阿那布と訓ても同
 言多如佐泥阿志
 又字多又美と有
 八重足又轉組の義
 子と訓ても有り
 此等と合せて

加夜流年泥遠多久豆怒能斯路岐多陀年岐曾祀多岐
 多岐麻那賀理とし統けりて給へり是即多岐
 麻那賀理ハ胸を叩き腕を拱くとの二を合せ給へり
 御句ありけ故あり猶句大元皇子御歌子伊慕我提塢
 傍例你魔柯施每傍我提塢磨伊慕你魔柯施每摩在桑
 這羅多多企阿藏播梨と有りハ胸を云すして多企
 子て持せ上あり手より受て舛ハりと宣へる已此
 句の同意あり思合す可し故此麻那賀理ハ右の阿
 藏播梨と等しくして次あり麻多麻傳多麻傳佐斯麻
 岐の語の大綱を云ありければ相離して見へり

うぐず借麻那賀理ハ記傳ハ麻奴加流あり麻奴加流
 ハ麻奴久を延たり言麻奴久ハ拱コモクと同言古麻奴久ハ
 組貫あり今ハ其古麻奴伎の古を省き伎を延て麻那
 賀理と云るゆて互に手を差交し抱く申より彼拱ハ
 己ヶ左と右の手を組貫あり此ハ女手と男手とを組
 貫すれば事ハ少ク異ればとも言の意ハ全く同ト又
 靈異記ハ婚合を久奈加比須と有り本同言して組の
 美を省き奴を那と云ひ伎を加比と延たりあり略下
 云ればとも然る説めて其ハ傳七百十に注るが如く
 被八洲延元章第五一書あり鶴鶴を尔波久那夫理と

訓_三即庭組貫風_二て婚合の状を為す鳥_三あり_一依て
号たり_一者あり_二事云_三と更あり_四字鏡集_五婚字_六久
那具_七と_八麻具_九とも登都具_{一〇}とも都留夫_{一一}とも訓_{一二}久那
具_{一三}の組貫_{一四}あり_{一五}と_{一六}同言_{一七}あり_{一八}然れ_{一九}久那加比_{二〇}久那具_{二一}
本_{二二}の_{二三}年_{二四}を_{二五}差交_{二六}し_{二七}抱合_{二八}し_{二九}事_{三〇}あり_{三一}と_{三二}終_{三三}し_{三四}其_{三五}婚_{三六}事_{三七}の_{三八}称
ま_{三九}成_{四〇}れ_{四一}る_{四二}あり_{四三}けり_{四四}續古事_{四五}談_{四六}し_{四七}傳大納言_{四八}立_{四九}て_{五〇}舞_{五一}
程_{五二}に_{五三}冠落_{五四}し_{五五}けり_{五六}人_{五七}の_{五八}笑_{五九}合_{六〇}多_{六一}廣幡_{六二}の_{六三}大臣_{六四}嘲_{六五}け_{六六}れ
け_{六七}り_{六八}を_{六九}聞_{七〇}て_{七一}此_{七二}大納言_{七三}何_{七四}事_{七五}を_{七六}云_{七七}ふ_{七八}妻_{七九}を_{八〇}人_{八一}に_{八二}久那賀
礼_{八三}と_{八四}云_{八五}れ_{八六}たり_{八七}け_{八八}り_{八九}云_{九〇}ふ_{九一}と_{九二}も_{九三}有_{九四}る_{九五}類_{九六}是_{九七}あり_{九八}
比_{九九}の_{一〇〇}組合_{一〇一}の_{一〇二}義_{一〇三}あり_{一〇四}可_{一〇五}く_{一〇六}思_{一〇七}え_{一〇八}そ_{一〇九}其_{一一〇}説_{一一一}を_{一一二}成_{一一三}し_{一一四}け_{一一五}り_{一一六}
と_{一一七}今_{一一八}記_{一一九}傳_{一二〇}し_{一二一}組_{一二二}貫_{一二三}あり_{一二四}申_{一二五}を_{一二六}諾_{一二七}へ_{一二八}り_{一二九}久_{一三〇}那_{一三一}具_{一三二}の_{一三三}正_{一三四}し_{一三五}け_{一三六}り_{一三七}

其意と通ゆ_一を_二以_三て_四改_五め_六たり_七あり_八然_九れ_{一〇}麻_{一一}奴_{一二}加_{一三}流
古_{一四}麻_{一五}奴_{一六}久_{一七}又_{一八}久_{一九}那_{二〇}具_{二一}ふ_{二二}ど_{二三}矣_{二四}と_{二五}同_{二六}言_{二七}し_{二八}て_{二九}和_{三〇}歌_{三一}の_{三二}謂_{三三}より
出_{三四}たり_{三五}事_{三六}者_{三七}明_{三八}き_{三九}者_{四〇}あり_{四一}○_{四二}麻_{四三}多_{四四}麻_{四五}傳_{四六}ハ_{四七}真_{四八}玉_{四九}年_{五〇}日_{五一}て_{五二}玉_{五三}年_{五四}と_{五五}ハ_{五六}藤_{五七}ハ
一_{五八}き_{五九}年_{六〇}を_{六一}美_{六二}云_{六三}称_{六四}あり_{六五}し_{六六}上_{六七}し_{六八}真_{六九}の_{七〇}言_{七一}を_{七二}冠_{七三}す_{七四}時_{七五}ハ_{七六}愈_{七七}以
て_{七八}其_{七九}意_{八〇}を_{八一}深_{八二}く_{八三}云_{八四}ふ_{八五}り_{八六}○_{八七}多_{八八}麻_{八九}傳_{九〇}佐_{九一}斯_{九二}岐_{九三}ハ_{九四}記_{九五}傳_{九六}し_{九七}玉_{九八}年
差_{九九}纏_{一〇〇}あり_{一〇一}佐_{一〇二}斯_{一〇三}ハ_{一〇四}彼_{一〇五}方_{一〇六}へ_{一〇七}差_{一〇八}遣_{一〇九}あり_{一一〇}麻_{一一一}岐_{一一二}ハ_{一一三}枕_{一一四}し_{一一五}為_{一一六}る_{一一七}事
あり_{一一八}万_{一一九}葉_{一二〇}五_{一二一}丁_{一二二}子_{一二三}遠_{一二四}寺_{一二五}○_{一二六}咩_{一二七}良_{一二八}何_{一二九}佐_{一三〇}那_{一三一}周_{一三二}伊_{一三三}多_{一三四}斗_{一三五}半_{一三六}意_{一三七}斯
比_{一三八}良_{一三九}伎_{一四〇}伊_{一四一}多_{一四二}度_{一四三}利_{一四四}共_{一四五}利_{一四六}提_{一四七}摩_{一四八}多_{一四九}麻_{一五〇}提_{一五一}乃_{一五二}多_{一五三}麻_{一五四}傳_{一五五}佐_{一五六}斯_{一五七}迦_{一五八}閉
佐_{一五九}祢_{一六〇}斯_{一六一}欲_{一六二}能_{一六三}伴_{一六四}久_{一六五}陀_{一六六}母_{一六七}阿_{一六八}羅_{一六九}祢_{一七〇}婆_{一七一}ハ_{一七二}三_{一七三}丁_{一七四}子_{一七五}天_{一七六}飛_{一七七}也_{一七八}領_{一七九}巾
可_{一八〇}多_{一八一}思_{一八二}吉_{一八三}真_{一八四}玉_{一八五}年_{一八六}乃_{一八七}玉_{一八八}年_{一八九}指_{一九〇}更_{一九一}餘_{一九二}宿_{一九三}毛_{一九四}寐_{一九五}而_{一九六}師_{一九七}可_{一九八}聞_{一九九}と_{二〇〇}詠
り_{二〇一}取_{二〇二}と_{二〇三}注_{二〇四}さ_{二〇五}れ_{二〇六}たり_{二〇七}子_{二〇八}て_{二〇九}通_{二一〇}え_{二一一}たり_{二一二}即_{二一三}右_{二一四}に_{二一五}引_{二一六}る_{二一七}句_{二一八}大_{二一九}兄

今之應神天皇十三
 年御紀に於て能之
 利古波能波等
 給焉加不能等
 區羅摩手區と有る
 此ハ御手と云ふ
 事也阿比摩區
 摩手區と有る此
 御手と相差入
 給へる由と云ふ
 曰一延云

皇子御歌ヲ妹ガ手ヲ我ニ纏シ一ノ我ニ手ヲバ妹纏シ
 一ノ歌ハせ給へると同トク互ニ御手を差交シて纏
 給ふ可き思ふリ猶日代宮段倭建命御歌ヲ多ク和夜賀ノ
 比那袁麻迦牟登波阿礼波須礼杆佐近牟登波阿礼波
 意母附杆と有七手弱腕を纏くと詠せ給ひ又右
 五ノ引リ仁德天皇大御歌ヲ白腕纏すけばと歌
 八セ給へる多と皆御手を枕と為す給へる謂ふ者
 あり万葉三四ノ家有者妹之手將纏五ノ一ノ敷細
 乃手枕不纏と有を始として袂又袖を纏と云七手枕
 を纏く事を云ふ右の應神天皇御紀の阿比摩區羅
 摩手區を私記曰師說纏錦之意也

今之應神天皇十三
 年御紀に於て能之
 利古波能波等
 給焉加不能等
 區羅摩手區と有る
 此ハ御手と云ふ
 事也阿比摩區
 摩手區と有る此
 御手と相差入
 給へる由と云ふ
 曰一延云

有ハ當らず記傳ヲ麻久ハ枕ヲ為す事あり妹之手將
 纏ふ多ク多ク詠ふ又手枕纏と枕纏と枕纏と
 之麻久良加牟と云ふと有不云れたら備字鏡集ノ
 婚字を麻久と訓らる万葉二十卷十八下ノ多良知祢
 乃波我目可礼互若草能都麻牟母麻可受と有ら麻
 可受ハ本不纏の言ふら不婚の義を兼て云ふと聞
 中然ハ男女交合事ト云ふ云り○毛ノ那賀尔ハ記傳ヲ契冲説
 股長子ありと云り其ハ足を伸て寛くと寐る状不
 りと云れたら然ら言ふて足を伸る時ハ互ニ能其
 身小相副ス物ふを以てあり○伊波那佐牟遠公記傳
 子寐者將宿て遠ハ毛能遠と云意の辭あり次あり
 須世理昆賣命の御歌ヲ伊遠斯那世と有り万葉二
 四ノ小真波来依荒磯平色妙乃枕等卷而奈世流君
 二ノ丁

云云はと云く書
 例ハ万葉三十五
 又寝味眠不睡
 而ト有ふと證
 して知べき

杳聞と有る奈世流ハ寐ネク而有ル五ハ子夜周伊斯奈
 佐農と云ハ安寐マス不令宿カヌあり十四二十子伊利伎豆奈
 佐祢と有ハ入来而寝ヨクあり十七三十子吾平麻都等
 奈須良年妹平の奈須良年ハ将寐ヤスあり十九十八子安
 寐イミ令宿君平奈夜麻勢又我世兒平安宿勿令寝ヤスあど是
 等を合せて心得べし寐ネて不言ハ那奴泥と活キあり
 又伊と云ハ寐ネる事ありを寐イ平安宿又宿毛不寝ネふど
 重ねて云ハ常ホトあり補と云ハレなり但伊ハ神武天皇戊
 午年御死ミ子于時天皇適寐ミ忽然而寤之予何長眠若此
 年と有る長眠を那賀伊と訓て目を合せて睡ネ不事を

云あり然シるを其御事を長寝ナカ乎と作レたり実子ハ奴
 流ハ和即事トを云ふレども寝字を伊奴流と訓ニ睡ハ
 時ハ必目を合す物あり故ニ續け云語あり一と以
 て右ニも寝を眠の如く伊と訓む事あり右引レハ
 の言ニ當て寝を寐をも宿をも伊ト訓セたり是ハ
 り但正レくハ伊ハ眠字奴流ハ右ハ三字あり者不
 り故字ニハ其を連ハ用ヒみグ其語を以て分ツ
 時ハ混ルハ一うズ夜須伊ハ安睡あり伊麻伊ハ
 睡あり伊米ハ睡ヲ見ル伊ハ登志ハ睡ヲ連ル伊ハ岐
 多邦志ハ睡ヲ穢ノ意ヲ流ト一ニ為ルハレる事
 知バ○阿夜尔ハ阿那尔と云むカ如ク古語拾遺
 子事之甚切皆行阿那と注シ神武天皇戊午年御紀子
 大醜此云鞅奈弥你句と有る甚切又大字ハ義あり此

事傳五 丁十九 五百三 己子委しく注せれば今云
限子非ず ○耶古斐伎許志ハ記傳子勿恋詔ひ了と云
むが如し高津宮殿ハ田若郎女御歌子意皇岐美斯典
斯登伎許佐婆書記同御代大御歌子飲明呂伽耳枳許
嗟怒万葉十一 三十丁 狗上之鳥籠山尔有不知也河不
知二五寸許勢余名告奈十二 二十丁 空言毛持相跡令
聞惡之名種尔十三 十九丁 莫寝等母寸巨勢友又 二十丁
今二日許持有等曾君者聞之二二勿恋吾妹 二十丁
小和我勢故之可久志伎許散婆此等の伎許須皆詔と
云事あり此ハ人の言て我子令聞意より云事あり然

此れも其言人を尊きて云時ありてハ云ぬ言あり右
の歌共よて心得べし又中昔の物語書ふども申す
と云べきを聞ゆと云事常多し其ハ尊む人子申す
をのし云り然れば古言の伎許須とハ用格表裏の違
あり今ハ人ハ古言雅言の用格を知らず伎許須と伎許
申とをとも一心得又人の己子向ひて云事を聞ゆと
云ふと甚く癖事あり備此ハ常の格ありハ耶古斐伎
許志曾と有べき下の曾てふ辞無きも古歌子ハ例多
し若て右ハ二句ハ甚く吾を恋て然のし勿詔ひりと
慰めたり者あり 取と注されたり 但上歌の命者勿死
賜りと有と同意不

リと云れたるハ右九百三十二下ニ注るガ如ク其ハ
鳥を悪申して此鳥も打病の乞はと有を慰めて其諾
奉る可キ申を申されたるハ此ハ係らずと
知へし唯此ハ甚切子勿詔ひると云事と見て有ぬ可
キ事○許登能迦多理暮登母許遠婆の三句ハ右九百
九十注也ガ如ク事の言語ハ斯の如しと云事トモ
其思ハ昔を語聞元奉る由を云添るも歌意ハ預
るざ事あり○故其夜者不洽而ハ記傳ハ此ハ上ニ
男神の佐夜婆比尔阿理立志と詠給へる夜を指て其
トハ云あり女神の夜者將出と詠給へる夜を指てハ
非ず略下と云れたるガ如し○明日夜ハ記傳ハ久流比
能用と訓べし此即女神の用波伴傳那牟之有る夜ハ

リと云れき又其八十神段ト来日夜と有を其十三十一
ト来日ハ久流比と訓べし書紀ト明日クルツヒ且明年シタツキト
有る訓を見りト明字あるを阿久流トハ訓まて久流
と訓るハ是古言あり可久流比ハ聖日ト云ル但助舞の都ハ心得ず此助
辞を置へき言ハ非ず當昔是許の事ハ誰も能辨へ
たり可きを如何あり事ト云レト云れたるハ○為御
合也ハ記傳ハ美阿比志賜比伎と訓べしと有る依へ
ト其國生段ト如此言竟而御合生子淡道之穂之狭別
島也ト見え御天降段ト此御子者御合高水神之女萬
幡豊秋津師比賣命生子云々明宮段ト如此御合生御

子宇遲能知紀即子也亦見元統紀神龜六年詔子皇
后^止御相坐而食國天下之政治賜行賜家^利と有り○
地神本紀子大己貴神次娶高志沼河姫生一男児建御
名方神^{生信濃國諏方}と有り此女神子御合坐て令生
給へり御子建御名方神御在^{一坐}り備此時の奇御戸^ド
ハ^一其沼河比賣命の家を以て直子孀屋と成^一給
へり^一事上件の文子依て知りれたる然る子其御子
を令産給へり^一産殿ハ^一必能登國^一ありと思^一
き申有り其ハ傳廿九^{百十}上^{八十}子注^一るが如く神名
式子能登國能登郡能登生國玉比古神社ハ^一も大國

魂神の御事子て御在^一坐あり^一此能登^一云地名を
^一も負給へり^一其國作の御事子因^一れり事申すも更
あり^一同郡能登比咩神社と申す御在^一坐ハ上^{百三}
下^{十五}注^一る播磨風土記子謂^一ゆる努都比賣命と共子同
神子て此沼河比賣命の御事子^一其沼河ハ瓊之河
あり^一能登と云ハ瓊^ノ之^ト音子て此女神の御在^一坐^一
^一子因^一れり^{地名あり}と所見たり其名勝志と云物子鳳至郡
七尾の邊を諏訪海と云^一明神此所子て産化給へり
御産處の趾を小屋の間と云て産屋の水有り又圓宮^{ツララミヤ}
と云も有りと云るハ佗の古書子ハ且ても云^一ざる事

ありが古老の傳ふ所証べうさる者よして其頭
城郡と能登國てハ海を隔てて相對ふ所あり此國
ハ一七氣多大神の御在處よ一在けれハ其妃沼河比
賣命を一も此國の御在令坐て此の御子を引て令
生給へる事御産所御産水等の地詳は傳ハれを以
て著明き者あり一但統紀の元正天皇養老二年五
至珠洲四郡始道能登國と有て元ハ越前國あり一
て能登ハ僅一郡の名ありと雖も傳ハ卷百三十五
丁廿七卷七十一丁の注ろが如くハ洲起元章と謂ゆ
る越洲と云けろハ右此國の越國ハ洲起元章と謂ゆ
屬島あり一ハ越洲と云て一島の名ありつてハ其
後ハ陸続きと成て越前國ハ牧らるありハ古ハ能
登國の名ハ無り一事本すあり然れども國名ふじ
ハ言より被定へき者ハ非ず其地ハ行ろ所ハ從ひ

て命を給て可けれハ私ハ能登國と云ろハ已ハ在
ありむ事右等の神名を以てハ曉りつ可き事ハあり
或書ハ右の能登比咩神社を在能登郡村と云ルハ此
女神の因て其地ハ起りて郡名と成り良後ハ國名
ハ成れろ若て上ハ百ハ引ろ出雲風土記ハ島根郡美
保郷郡家正庚廿七里百六十四歩所造天下大神命娶
高志國坐神意支都久辰為命子倅都久辰為命子奴奈
宜波比賣命而令産神御穂須ニ美命是神坐矣故云美
保と有る此奴奈宜波比賣命ハ一七其沼河比賣命ハ
て坐あり一其生給へる御子ハ御穂須ニ美命御在
坐ハ石子引り一地神本紀ハ娶高志沼河姫生一男と
所見れろけれハ此女神の生給へるハ建御名方命一

柱より外御在り坐すトキ事ト有けルハ此御穂
須ニ美命と申す事ト有也亦名よてハ御在り坐け
るト名義ハ次多ク火明命の所にて合せ説べき事
備此沼河比賣命を奴奈宜波比賣命之有ハ加波を宜
波と記ル者多ク若て神名式ト隱岐國海部郡奈
伎良比賣命神社ト申す有ハ決ク同神ト有ト沼河
を奴奈宜波と記リ再記リて其國の方言ト然稱奉
ル者ト所見ナリ此を以見るハ大己貴神の越後國
にて婚ひ給へる後ハ處ト詳ハ御在り坐けりト
出雲ト有ハ其御子神ト一ト右ト謂ゆル美保の地

子御在り坐けりト有可ト神名式ト島根郡美保神社
風土記トハ美保社ト有リ故ト中御穂須ニ美命左大
己貴命右奴奈宜波比賣命ト云リ又未官知ト三保社
ト云有リ事代主神及百八十一神を祀ト云ハ然
ト有トヤ右ト奈伎良比賣命神社ト就テ思合セト
中國射水郡布西郷有リ式ト布勢神社見ハ諸統紀ト
大宝二年三月甲申分越中國四郡屬越後國ト有テ頭
城郡ハ本越中國ト引ケルハ由無ト云ベクト有テ
右ト右百二丁ト引ケルハ由無ト云ベクト有テ頭
郡沼川郷多布勢之神沼山ト云事有テ此ト多布勢の
地名有ハ八千ト神の卧屋を建サセ給ヘラト因ル
其謂ルハ大ト若テ上ト百三十ト注セラ播磨風土記揖保
郡伊和郷の文ト昔大汝命之子火明命心行甚強是以

父神患之欲遁棄之乃到因達神山遣其子汲水未還以
前即發船遁去於是火明命及水還來見船發去即火瞑
怒仍起風波追迫其船於是父神之船不能進行遂被打
破中尔時大女神謂妻努都比賣曰為遁惡子返遇風波
被太辛苦哉所以曰火瞑鹽曰苦齊之所見此努都比賣命ハ右子謂
申の能登比咩神申て即沼河比賣命申多可く又此火
明命ハ一右の御穂須と美命と次く同神あり然る
ハ此文ナ火瞑怒ナと有ハ即傳十四九下十注ナガ
如く御記ナ忿然イカリ作色オモヒ又赫然オモヒふど有と一事ナて此御
子の心ココロ惡ナ無く坐を以て負給へるナて御穂須ニ美命

と云ふ穂ハ神功皇后元年御紀ハタスキホニイテシロシヤに幡萩穂出吾也万葉
十四二十下六ふ波太須酒伎穂尔良之伎美我ふど有と穂
子て思の色イロ發ハるナを云て即心の事ありけれバ
心進ホスムの義ナありけり右の文ナ心行甚強と云ひ即火瞑
怒仍起風波追迫其船と有り又御父神の惡子と宣へ
るふどを以てし著きを古事記國辭段ナに其建御名方
神子引石擊ナ手末而來言誰來我國而思ナ如此物言然
欲ナ為ナ力競ナと有ふどの御心の進ホスムのせ給へるナと因ナに
バ実ナに此の火明命御穂須ニ美命ハ一神ありて即其
建御名方神ナに坐す事疑無ナる可き者ありナ一但神代

高野宮
文庫

大己貴神

小火明命と申す二柱御在り坐る其一ハ古事記及丹
 後風土記に見えたり天火明命是なり天孫降臨章
 彦火と出見尊の御子と為るハ傳の誤なりして実ハ
 鏡速日命の亦名なり由傳廿一四廿二七廿三上廿四百
ハ注カ如く其火明ハ鏡ハ因レ化ル事ニ別ナリ其
 一ハ此火明ハ心ハ進ム同義ナリ思混ハ不可ク然
 御名方神一柱のこ御在り坐けり其神の委キ傳
 八傳三十一二百丁古事記を以て注シ奉ル可キ者
 あり御須ニ美命大美美主命底龍命磐持命國玉彦命

高野宮
文庫

